

若竹

第47号 別冊

2020年9月1日発行

創立100周年記念号

特集●富士DNA

第五高女から連なる
富士高生気質を探る





9 後夜祭の舞台を飾ったバスケットボール部芸能部（エイトマン）10 体育祭での熱き応援風景11 自由な雰囲気の教室（高校30期）



9



1 本科25期の井出（巻島）俊子さん提供の写真、母校屋上にて2 同、1947年3月の卒業記念写真3 同、謝恩会演劇の「門出」



1



3

学校の形は 変わらぬ

変わっても、 DNA



11



14 高校59期の村田晴信さんが文化祭の時に手掛けたファッションショー15 体育祭の華、チアガール（高校56、57期）

14



15



12



13

12 俳優の北村有起哉さんが3年の時の文化祭で脚本、演出などを担当した「仁義なき戦い」13 1981年文化祭。右から2人目が有吉玉青さん



5

5 清里寮でひと夏の思い出を作る（高校27期）6 運動会で赤穂浪士の仮装行列（1958年、高校13期）7 軽音楽部（ドラムは高校26期小久保隆さん）8 スキー教室（1973年）



4

4 京都への修学旅行（1973年、高校27期）



7



6



8

目次

- 2 学校の形は変わっても、変わらぬDNA
——第五高女から富士



- 6 受け継がれる自由な気風 互いを尊重し、力を発揮
——第五高女／富士の100年〈年表〉

- 10 津村節子さん（第五高女本科23期 作家 インタビュー）

「戦争で勉強ができなかった」「学び直し」で文学者の道へ

- 14 「高校生が夢中になる小説を書きたい」
——母・有吉佐和子の思い出

【寄稿】有吉玉青（高校34期 大阪芸術大学教授）

- 16 堀文子さん（第五高女本科13期 日本画家 インタビュー）
感性を研ぎ澄まし 感動を絵に描く

- 20 【対談】森本毅郎さん（キヤスター）×
石川次郎さん（編集者）

「同級生と運命的な出会い」石川
「挫折と背中合わせの青春」森本



- 44 【対談】佐藤隆一郎さん（東京大学大学院教授）×
加藤尚志さん（早稲田大学教授）

「米国留学で研究者魂を学んだ」佐藤
「先輩に20年間の経験を伝えたい」加藤



校友の100年

生徒会誌からたどる第五、富士のあの日・あの時

【寄稿】反中章子（高校23期；100周年記念事業アーカイフ班）

- 60 池澤夏樹さん（高校16期 作家 インタビュー）
いろいろな土地を訪ね
いろいろな本を読んでみよう



- 64 和田竜さん（高校40期 小説家／脚本家 インタビュー）
高校時代は「映画漬け」映像のように小説書く

- 68 よしながふみさん（高校42期 漫画家 インタビュー）
私生活を大切にしながら 面白いものを描きたい

- 72 【対談】永井愛さん（劇作家）×
高橋明也さん（美術史家）

「演劇は自分をリセットする場」永井
「美術の楽しみ方を提案したい」高橋



- 24 【対談】井出洋介さん（競技マージャンプロ）×
小久保隆さん（環境音楽家）

富士の自由に後押しされ
やりたいことを仕事に



- 28 大野恒太郎さん（高校22期 元検事総長 インタビュー）
臆することなく 法曹界を目指してほしい

- 32 大谷直人さん（高校23期 第19代最高裁判所長官 インタビュー）
「歩く六法全書」では 良き法律家になれない

富士高トリビア

- 13 峯島喜代女史／徒歩遠足

- 19 美男美女コンテスト／富士新報

- 36 天文台／プール／シンデレラ階段／白衣



- 38 臼井興胤さん（高校29期 コメダ社長 インタビュー）
グローバルに活躍し いろいろな分野に挑戦

- 40 【対談】謝敷宗敬さん（日鉄ソリューションズ前社長）×
校條浩さん（米NSVウルフキャピタル代表）

「米国留学でITのパワーを知る」謝敷
「独立しデジタル社会を生き抜く」校條

- 76 【対談】清水慶太さん（フロダクトデザイナー）×
村田晴信さん（ファッションデザイナー）

「日本人のルーツを作品に」清水
「独立し自分の世界を発信」村田



- 80 北村有起哉さん（高校45期 俳優 インタビュー）
富士高だから開花した 多くの役者人生

- 82 安井清子さん（高校32期 ラオス山の子ども文庫基金代表 インタビュー）
ラオスの図書館で 子どもたちの世界を広げる

- 84 北村勝史さん（高校9期 幟旗収集家／研究家 インタビュー）
40歳で第二の人生を考えよう「楽しいかどうか」が選択基準

卒業生座談会

- 86 PART1 谷畑先生と卒業生8人が「富士」を語る

- 92 PART2 安倍宏行さん（ジャーナリスト）×高校71期生の皆さん

編集後記

- 98 富士のDNAを伝え、受け継ぐ——中高一貫校と若竹会
100 101年目からの富士——野村公郎統括校長に聞く

受け継がれる自由な気風 互いを尊重し、力を発揮

富士のDNA（遺伝子情報を記録している物質）は何か？が、記念誌を貫くテーマだ。インタビュアーや対談を通じて「富士は自由」という言葉をよく聞いた。富士は自由な高校なのか。

「第五高女は規律や礼儀作法に厳しかった」「中高一貫校は多くの規則に縛られていた」という声を聞いた。土足で校内を闊歩していた学校群制度の時代から、中高一貫校になる直前まで、富士が自由だった限られた時期だったのだろうか。

しかし、厳しい規律の中で礼儀作法の教育にも熱心だった第五高女時代の先輩にお目にかかる、そんな疑問も吹っ飛ぶ。規律や礼儀作法で縛られた学校で育ったとは思えないほど、自由闊達なのだ。

画家の堀文子さん（本科13期）。きれいな日本語を話されるのが第五高女の先輩に会うと感じる第一印象だ。けれど、「自分の言葉」でウィットに富んだ表現をする堀さんは、まさに自由な表現者だった。一つの型にとどまらず、「自分

中学校統括校長は、「周りを巻き込み、世界にChallenge、失敗してもgood tryというのが今の富士の合言葉。富士のDNAは生かしていきたい」と語る。

理数アカデミー校、英語教育推進校、スポーツ特別強化校、文化部推進校などに指定され、生徒を育む環境は整いつつある富士。理数アカデミー校の行事であるシリコンバレー研修は、卒業生の校條浩さん（高校24期）の尽力で実現した。卒業生が現役生に力を貸すことで、富士のDNAは受け継がれていくのかもしれない。（文・相川浩之）

第五高女と富士の100年

■源流は新宿にあった（1920年）

- ・東京府立第五高等女学校が東京府豊多摩郡淀橋町字角筈（現在の新宿・歌舞伎町の新宿東宝ビル付近）に開校（1920年）
- ・「生徒を型にはめず、自ら考えさせ、実行させる教育」が創設の理念
- ・初代校長白石正邦は元学習院教授。石門・心学の研究者としても知られる
- ・本科5年制各100名（のちに各



第五高女校舎

の成功体験」や「尊敬している人」にさえ縛られたくないと言っていた。たまにいたずらっぽく目をして小声で「悪行」を語る堀さんのお茶目さにも惹かれた。

第五高女に入学し、富士を卒業した高校2期の竹内（酒井）保子さんは、「小学校の全校で成績が一番というような女性たちが集まったからか、厳しい規律や女子教育があったとしても、それはそれと、自分のものにしながら、学校生活を楽しんでいた」と話す。「お互いを認め合い、なんでも否定するのではなく、まずなぜそうなのだろうと考えるのが第五の文化」という。

座談会で高校31期の飯島章博さんが「それぞれが相手を認めていた。だからいじめなどは絶対に起こらない」と発言。中高一貫校卒業生（高校71期）の油井彩姫さんも座談会で「皆が互いの個性を認め合うところが富士高生らしさではないでしょうか」と話している。互いを認め合う伝統の中で、自由や創造性が発揮され、多彩な分野で才能が開花した。これが、富士のDNAなのかもしれない。

101年目の富士は、高校での入学生募集がなくなり、すべて中学校からの入学になる。いろいろな中学の出身者が集まり、時に切磋琢磨し、時に協力し合う、そんな文化がなくならないか心配だが、野村公郎富士高等学校・附属

200名。初年度は1、2年のみ

- ・調息、徒歩遠足、転地修学などの課外活動も活発
- ・校長以下、職員、生徒から成る「校友会」が組織される
- ・「東京府立第五高等女学校同窓会」発足（1924年）

■第五高女の隆盛期（1927年）

- ・府内屈指の難関校となる（平均倍率6倍）
- ・規律正しい中にも家族的温かみのある校風が築かれる
- ・「校友」「第五だより」などの刊行物も充実
- ・家事専攻科併設、3年制定員120名（家事科中等教員免許などを無試験で取得できた）
- ・同窓会名を「若竹会」に。会誌創刊（1935年）

■戦争による苦難の時期（1939年）

- ・農場（中野富士見町の現所在地）で野菜作り
- ・報国団が結成され、学校全体が戦時体制に入る（1942年）
- ・東京都立第五高等女学校と改称（1943年）
- ・空襲のために校舎焼失（1945年4月14日未明）
- ・校舎なき3年間は近隣の小学校を転々とし、間借り授業
- ・都立四谷高等家政女学校が本校に統合（1946年）

■新制高等学校発足(1948年)

- ・学制改革により、東京都立第五女子新制高等学校に(1948年)
- ・木造新校舎落成、中野富士見町に移転(1948年)
- ・新生徒会発足(1950年1月)
- ・東京都立富士高等学校に改称(1950年1月28日)
- ・共学開始。男子100名、女子150名(1950年4月)
- ・新校章制定(1951年)



戦後木造校舎

■学区合同選抜制度(1952年度～1966年度)

- ・第1回文化祭(1953年)
- ・校歌公募・選定
- ・短水路公認プール完成(1954年)
- ・第1回富士高祭。文化祭と体育祭をひとつに(1960年)
- ・鉄筋校舎落成(1961年)
- ・入学者数増加454名・9学級(1963年)



戦後鉄筋校舎

- ・清里寮完成(1963年)

■学校群制度(1967年度～1981年度)

- ・都立西高等学校と組んで第32群となる。440名・9学級
- ・バリケード封鎖／学力テストボイコットなど(1969年)
- ・私服通学が認められる(1970年)
- ・文化祭と演技祭の二本立てに(1971年)
- ・男女ほぼ同数に(1972年)
- ・体育祭を文化祭から切り離し、6月開催に(1974年)
- ・生徒会解散案が出される(1976年、臨時生徒総会で解散案は否決)

- ・文化祭／演技祭／体育祭が華やかに
- ・1971年から79年まで、東大合格者数が現役、浪人を合わせ30名を超える
- ・演技祭と文化祭が一本化される(1981年)

■グループ合同選抜制度(1982年度～1993年度)

- ・臨時学級増で入学者数484名・10学級に(1983年)
- ・文化祭でミュージカル、体育祭でマス・ゲームなど、ビ

ジュアル系文化へ

- ・校舎改築に伴う文化財発掘調査(1988年)
- ・清里寮閉寮。27年間の歴史に幕(1990年)
- ・校舎全面改築。約2年間の工事を経て落成(1991年)
- ・指定上履き制導入により長年の土足問題が解決



現在の校舎

■単独選抜制度(1994年度)

- ・少子化に伴い、入学者数減320名・8学級(1995年)
- ・三大自然定着(体育祭5/6月・富士祭9月・合唱祭2月)
- ・体育祭のマス・ゲームなくなる(1997年)
- ・授業公開始まる(1999年)
- ・新体育館落成(2001年)
- ・修学旅行に航空機利用解禁(九州・沖縄)

■学区制度の廃止(2003年)

- ・東京都全体から受験可能になる

- ・二学期制を導入
- ・スポーツの隆盛
- ・硬式野球部が夏の甲子園西東京大会でベスト8まで勝ち進む(2007年)
- ・定時制課程閉課程。69年の歴史に幕(2008年)

■中高一貫校スタート(2010年)

- ・募集者数高校200名・5学級、附属中学校120名・3学級
- ・制服の義務化(2013年)
- ・修学旅行(高2)でマレーシアへ(2013年)
- ・オーストラリア語学研修(2013年)
- ・奉仕校外学習(高1)で福島訪問(2013年)
- ・理数アカデミー校に指定される(2016～2021年)
- ・英語教育推進校(2017年)
- ・東京都スポーツ特別強化校(2017年)
- ・文化部推進校(2018年)
- ・若竹育英奨学金制度発足(2018年)
- ・シリコンバレー研修(2019年)
- ・2021年度からの高校の生徒募集停止決定(2020年)

「戦争で勉強ができなかった」「学び直し」で文学者の道へ

第五高女本科23期・作家
津村節子さん



津村節子（つむら・せつこ、本科23期＝1945年卒）28年福井市生まれ。53年学習院短期大学卒。64年『さい果て』で新潮社同人雑誌賞、65年『玩具』で芥川賞、90年『流星雨』で女流文学賞、98年『智恵子飛ぶ』で芸術選奨文部大臣賞、2011年『異郷』で川端康成文学賞を受賞。夫は作家の吉村昭（故人）。

「第五高等女学校（第五高女）にいた時は、大東亜共栄圏のためのいくさに勝つことが東洋平和の目的と叩き込まれていました」と第五高女本科23期の津村節子さん。戦時下の第五高女の様子は津村さんが著書『茜色の戦記』に描いている。「勉強がほとんどできなかった」が「学びたい」という思いは強く、学習院女子短期大学を受験。文芸部立ち上げがきっかけで吉村昭氏と出会い、二人で文学の道を歩むことになる。時代に流されずにチャレンジする姿は、富士高校卒の多くの女性たちにも通底するのではないか。

——第五高女に入学した理由は。

「私は昭和3年に福井県福井市に生まれ、9歳の時に母が急性肺炎で死去した。父はかねて3人の娘たちを東京の女子専門学校か女子大に（男女共学の大学はなかった）進学させる心づもりで目白に家を借り、進学率は1位か2位と

言われた高田第五小学校に5年生から転入させ、新宿にあった府立第五高等女学校を受験させた。第五高女は進学率が抜群で、高田第五から受験する生徒はクラスで極めて上位のものに限られ、当時のナンバースクールと言われた府立第一、第三、第五あたりを目標にしていた。高田第五は成績上位の者は教室の前の席に座り、級長は赤い毛糸で作った記章、副級長は白い毛糸の記章を付けていた」

——第五高女で過ごした日々で思い出すことは。

「府立第五は制服に血液型を記した名札と丸い大きな銀のバッジを付けていた。始業10分前に調息を行って精神を統一し、昭憲皇太后の御歌を雅楽風に作曲したものを声を揃えて奏唱する。楽しめるべき遠足も梅干し一つの日の丸弁当。ただひたすら歩くだけで、お喋りは厳禁。3年生からは勤労報国隊として働いた」

「男の先生は妻帯者に限られていた。上級生は可愛い下級生をほのかに思い、下級生は宝塚の男役のような颯爽とした上級生に憧れて、手紙を下駄箱にしのべたりするS（エス）がひそかな楽しみだった。眉目秀麗な海軍士官が戦意高揚のための講話をしに現れた時には、窓という窓は生徒の顔が鈴なりだったことを懐しく思い出す」

「府立第五高女で正規の授業を受けたのは2年生まで。英語は昭和18年4月までで、女学校では必要ないと、選択履修になった」

「1回目の空襲があつたのは昭和17年4月18日で、B25中型爆撃機による。不気味な警報が鳴り響いた。米国による日本初空襲である」

——終戦から学習院女子短期大学に入るまでの経緯は。

「私の家族、祖母、姉、妹は母の実家を頼って埼玉県入間川町（現狭山市）に疎開。私は目白の叔父の家から女学校在籍のまま工場に通っていた。この戦争は東洋平和のための聖戦で、必ず勝つと信じていた。空襲が激しくなり、叔父一家も焼け出されて敗戦——。男一人に女トラック一杯と言われる時代になり、女でも手に職を持たねばと焼け跡に建てられたバラックのドレスメーカー女学院に通い、入間川で洋服店を開いていた」



二列目中央が制服を着ている私

「服地がないので和服の更生で繁盛していたが、学習院に女子短期大学が設けられたことを新聞で知り、翌年2期生として入学。早速文芸部を作った。目白の大学の文芸部の委員長は吉村昭だった」

「大学の『学習院文藝』（昭和27年に『赤繪』と改題した）8号に掲載された吉村昭の『死体』を読んで、ショックを受けた。こんな作品を書く同人がいては私は駄目だ、と絶

徒歩遠足

約1000名のおさげ髪の少女が延々と列をなして郊外の山野を歩く——第五高女の名物ともいえる月に1度の徒歩遠足である。若くして病没する生徒や卒業生が後を絶たないことに心を痛めた初代白石校長が、「丈夫な体をつくる」ために発案した全校一斉の行事だった。

1924(大正13)年～1935(昭和10)年の72回分については「徒歩遠足案内」(冊子)に詳細な記録が残されている。

行き先は平林寺、村山貯水池、高幡不動、川越など。途中まで電車とはいえ、毎回10～15キロ、往復4時間余りを歩く行程は相当にきついものだった。

卒業生の思い出話には、徒歩遠足によって「体力に自信がついた」「第五魂が養われた」という感想が(足が太くなったというウラ話も)多く寄せられている。しかし戦時体制下では、生徒が勤労動員や農作業など過酷な労働に明け暮れることになり、回数を減らし「健民遠足」「行軍」という名目で1944(昭和19)年まで実施された。(反中)



大正15年の徒歩遠足案内より

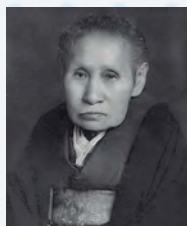
峯島喜代女史

富士高校の前身である第五高等女学校は当時の東京府によって創立された。なのになぜ設立功労者として「峯島喜代」の名前が記されているのか。それには以下のような経緯があった。

1918(大正7)年11月、死期を悟った尾張屋峯島喜代女史は「50万円を寄附するから、これで家政を主とし、実際に役立つ教育をする学校を拵えてもらいたい」と近親者に告げる。一同はただちに東京府庁にその意向を具申し、臨時議会において寄附金受理が決定された。そして翌12月、女史は安らかに86歳の生涯を閉じた。その後東京府豊多摩郡淀橋町(現在の歌舞伎町界隈)の約3400坪が峯島家から無償で東京府に貸与され、1920(大正9)年、その地に府立第五高女が誕生した。

実業家として成功した女史にはさまざまな逸話が残されている。先見の明、質素儉約、無類の世話好き、等々。

やがて昭和という激動の時代を経て、第五高女は富士高校、富士中高へと形を変えたが、設立の祖として「峯島喜代」の名は校史の1ページ目に刻まれている。



第五高女設立功労者
峯島喜代女史

お金というのは無くなればそれまでだが、教育への投資効果は100年以上続くという証であるといえる。(反中)

血液型を記した名札と大変目立つ第五のバッジをつけている



「ドレスメーカー女学院に通って自立する力はずっとあったが、学業は女学校2年生まで。コンプレックスにいつもさいなまれていた。高校卒業の認定試験に合格し

「府立第五で学んだのは2年生までで、あとは農場作業や救急看護訓練、防空訓練などに費やされ、3年生からは下丸子の軍需工場で働き、戦時特例で5年生と一緒に4年終了で卒業した一番勉強ができなかった年代である」

「一度は諦めた進学に再挑戦した経緯は。」
「府立第五で学んだのは2年生までで、あとは農場作業や救急看護訓練、防空訓練などに費やされ、3年生からは下丸子の軍需工場で働き、戦時特例で5年生と一緒に4年終了で卒業した一番勉強ができなかった年代である」
「ドレスメーカー女学院に通って自立する力はずっとあったが、学業は女学校2年生まで。コンプレックスにいつもさいなまれていた。高校卒業の認定試験に合格し

なければ短大を受験することはできない。高校卒業の認定試験はどこで受けられるのでしょうか、と短大に問い合わせると、うちでやってあげますと言われ、繁盛していた店を閉め、1年間猛勉強して認定試験を受けに行くと、受験生は私ひとりだけで、5年も年下の高校卒業生と短大を受験した」
——第五高女を選んだ理由は？
「ナンバースクールの中で学力が高いのと、勉強だけでなく、教養も身につけられると思った。両親を早く亡くして祖母と3人姉妹の家族だったから、礼儀作法も身につくと思った。『こぎげんよう』という挨拶は、会った時も別れる時も交わし、下丸子の軍需工場で朝礼の時も作業終了解散の時も口にしていた。若い工員たちがからかつて、『こぎげんよう』と言ったものである」
——第五の先輩方は同窓会に熱心だが。
「私たちの時代は同年生の生徒たちがなるべく親しくなるようにという考えから、毎年、クラスのメンバーが入れ替わった。私は今でもこの方針には疑問を持っている。特に親しい友達がいなかったのは、深く付き合うことがなかったからだと思う」
(2019年8月18日、相川浩之の質問に文章で回答)

「高校生が夢中になる 小説を書きたい」

母・有吉佐和子の思い出

高校34期・大阪芸術大学教授
有吉玉青

母・佐和子は昭和23年4月に、都立第五女子新制高等学校に転入しました。学制改革があったときで、その3月に私立の女子高校を卒業していますが、もう一年、高校に通ったのです。

当時の楽しい写真がのこっています。11月7日の創立記念日バザーのときのもので、皆、仮装をしています。165センチの長身だった母はまわりより頭ひとつ大きく、白いズボンにブレザー、船長さんのような帽子をかぶって「蝶々夫人」のピンカートン。隣の女子と仲良く腕を組んでいます。

高校の演劇会の写真もあり、こちらは武士の衣装で丁髷のかつらをつけ、芝居気たつぷりに写っています。母は大学の演劇好きで、大学時代に演劇雑誌の懸賞論文に応募して入選し、それが書き手としての出発点になりました。小説

に言いました。襟にかぶせる白い襟は、「この白い襟がいいんだ」とまぶしそうに。

その制服ですが、着たのははじめのうちだけでした。ほとんどの生徒が私服で通っていましたし、洒落つ気も出てくる年ごろでした。ある日、流行のバックプリントのブラウスが、通学にあるまじきふざけた格好だと母の不興をかい、しばらく制服で通わされましたが。

当時、私は母の娘だと言われるのがいやで、今から思えば申し訳ないことをしたと反省しきりですが、入学式は母に來ないでもらいました。小学校3年のときに『恍惚の人』がベストセラーになり、以来、何かといえば母のことを言われて辟易していたので、高校では自由にやりたかったのです。ところが1年生の夏休み前に配られた名簿の保護者欄の名前で露見してしまいました。

友達に母のことを聞かれる中で、一人の男子が、私にそつと尋ねました。

「お母さん、作家なんだって？　なんていう名前？　何を書いているの？」

これは家で笑い話になりましたが、ひとしきり笑ったあとで、母がぼつりと言いました。

「高校生が夢中になって読む小説を書きたい」



有吉玉青（ありよし・たまお、高校34期＝1982年卒）63年東京生まれ。86年早稲田大学哲学科卒。88年東京大学文学部卒。東京大学大学院在学中に『身がわり』により坪田譲治文学賞受賞。93年ニューヨーク大学大学院演劇学科修了。著書に『恋するフェルメール』『美しき一日の終わり』など多数。

以外に戯曲やミュージカル、文楽や日本舞踊の台本も数多く手がけていますが、写真を見てみると、文藝春秋主催の文士劇に張り切って出演していたことを思い出します。

私が高校を受験したときは学校群制度でした。富士高校に入学し、はからずも母の後輩になりました。制服は基準服といい、必ずしも必要ではなかったのですが、母は私を見据え、峻厳な口調で言いました。

「私は制服を買ってもらえなかったけれど、貴女には買ってあげます」

思えばそれが、母が自分の高校時代について初めて語ったことかもしれません。あるいは私が聞いていなかったのか。往々にして、子供は親の話を聞いていませんから。

制服の採寸に行った折、母はセーラー服のエンジンの3本線を見て、「この3本線がお洒落だったのよ」と、嬉しそう

高校生に読まれていなかったことは、母にとつてかなりショックだったのです。

それでもこのことをきっかけに、母には学校行事に來てもらうようになりました。体育祭、文化祭、そして卒業式。母はカメラを持ってやってきました。文化祭では芸達者な友達がいると、「あの子をスカウトしたい！」などと言います。始末です。

保護者会にも出席しました。あるとき、校内を歩いていたら、白髪の先生に「佐和ちゃん！」と声をかけられたそうです。

「娘さんを教えてるよ！」

それが英語の式田次雄先生。授業中にあてられて、わかりません、と言ったら、「おまえのお母さんはそんなこと言わなかったぞ。早く訳せ」

教室では健やかな笑いが起きました。私も苦笑いをして、訳しはじめました。

都立富士高校は、私たち母娘にあらたなページを開いてくれました。

昭和23年11月7日、創立記念日バザーの仮装でピンカートンを。



感性を研ぎ澄まし 感動を絵に描く

第五高女本科13期・日本画家
堀文子さん(故人)



堀文子(ほり・ふみこ、本科13期=1936年卒)日本画家。18年東京生まれ。40年 女子美術専門学校(現・女子美術大学)卒業。大磯、軽井沢にアトリエを構え自然の中に身を置いて制作。70歳でイタリア・トスカーナに移住。帰国後もアマゾン、ペルー、ヒマラヤ山麓などに取材旅行。19年100歳で逝去。

日本画家の堀文子さん(第五高女本科13期)には、2012年8月30日、ラジオNIKKEIの番組「集まれ!ほっとエイジ」の収録で初めてお目にかかった。ラジオNIKKEIには当時、若竹会の副会長を務めていた小森(大宮)杜喜子さん(高校18期)がいて、筆者(同27期)が始めたこのラジオ番組の相方を務めてくださった。そして、第五高女の大先輩にインタビューする機会を得た。当時の収録声を聴き直すと、堀さんに「第五高女の遺伝子」を感じる発言がたくさんあった。そんな発言を拾ってインタビューを再構成してみた。

堀さんは今年(12年)7月に、94歳になられました。

「私は、歳を意識して生きてきたことがなく。毎日、つものめるようにして生きていたうちに、いつの間にか94歳になりました。地球が太陽の周りを1回、回ると1つ年をと

私にしてみれば、そのときの記録なんです。同じ自分はいないんだということがあります」

——絵描きになろうと決めたのはなぜなのでしょう。

「東京府立第五高女の2年のときに、私は自立したかったの、何かの仕事で生きていこうと思いました。どういうことをしたいかと考えましたが、(一番なりたかった)科学者になろうとしても、男女差別のひどい時代でしたから、大学なんかには入れなかったんです。専門的なことをしようと思うと『女子』と名のつくところじゃないと入れないのです。美術学校だって上野(の東京美術学校)には入れなかった。今の皆さんはびつくりされるでしょうけれど、

そんな時代に私は育ちました。でも、美に近いものは誰にも害を与えないで生きていける、美の周辺で生きようと考え、絵に近づきました」

——女子美術専門学校(現・女子美術大学)師範科日本画部を卒業し、東京帝国大学農学部で農作物の記



ラジオ番組で堀文子さん(中央)にインタビュー。
④高校18期の小森(大宮)杜喜子さん、⑤筆者

録画を描く仕事をされていました。

「美術学校を出たら、絵の先生になるのが生きる道だったんです。ただ私は先生にだけはなつてはいけなくて自分で決めていたんです。未熟な人に向かって自分が偉いような感じで教えるのだんだん堕落するんじゃないかと思いましたから。でも就職先がなくて大変苦しみました」

「東京帝国大学農学部には、自然に対する興味があり、そういうものを記録する係を求めているというお話があったので喜んで伺いました。そこで自分が何かを覚えられとも思いました」

——堀さんが影響を受けた方は?

「私はすぐに影響を受けやすい性質なので、尊敬する人には近づかないようにしていました。言うなりになつて、話し方まで似てきてしまいますから。その方の世界から逃れられなくならないよう、付かず離れずの関係を保ちました。だから決まった師匠はいないんです」

「私は重大なことも親に相談したりしないという主義なんです。人のいいなりになると、人のせいにしてしまうからです。絵を志すと決めた時も、自分で分析し、私流に縦軸と横軸をつくつて、小学校のときから第五に入るまで、学校でということが好きだったか、努力をしたかという軸

富士新報

1949年に発足した生徒会では、報道部の下に新聞班(富士新報)、編集班(校友)、放送班が置かれ、富士ジャーナリズムともいべき一時代を築いた。

富士新報はタブロイド版2ページ(特集号は4～12ページ)。主な記事は生徒会や学内行事だが、他校への取材も積極的に行うなど、広い視野に立つ充実した紙面構成であった。また戦後の民主主義教育による批評精神も旺盛で、たとえば男子1期生からの要望として「上級生の態度に反省を促す」などの記事も見える。1950～60年代を通じて隔月で発行され、新聞班の活動は活発であったことが伺える。のちに芥川賞候補となる作家・干刈あがた(高校13期)も新聞班に在籍していたことを記憶に留めたい。

やがて学園紛争の時代を迎え、社会問題や政治活動を取り上げたことが影響したのだろうか。118号(1969年)を最後にいったん休刊する。その後「新聞部再建」を掲げて1001号から復刊されたが、現存史料で確認できる富士新報は、1027号(1978年)までである。(反中)



1969年(休刊の直前)の富士新報

美男美女コンテスト

かのFacebookのはじまりは学内女子の顔写真を比較するゲームだったとか。

古今東西を通じて、美人のランク付けは男子のひそかな楽しみといえるだろう。ミス富士を選ぶ投票が始まった時期には諸説あるが、石川次郎氏(高校12期)の「自分が始めた」という証言が最も古く、1950年代の終わり頃からと思われる。男子のみに投票用紙が配られ、結果も男子トイレに貼りだされるという、いわば裏のイベントとして定着した。名称も、美人コンテスト、ビューティーコンテストなど年代で異なるが、ある時期からFPC(Fuji Pretty Contest)に落ち着いた。

一方で女子も負けていないのが富士のDNA。1969年頃からはミスター富士を選ぶFDC(Fuji Dandy Contest)がFPCと同時開催され、結果の順位は中庭に堂々と垂れ幕で発表されるようになった。(ある年の卒業アルバムに、垂れ幕の写真が偶然残されている。)

今では問題視されるミスコンだが、当時のミス富士、ミスター富士といえ、卒業後何十年を経ても語り継がれる輝かしい荣誉であったという。

しかし1980年代半ば以降、この種のイベントは行われた形跡がなく、代わって男装女装コンテストが出現したのは時代の趨勢というべきか。(反中)

ラジオ番組収録に若竹会の担当者も参加した
(2012年8月30日、東京・千代田のグランドアーク半蔵門で)



て、人間がこの世の不思議の原理を追究しようとしたときには、ルネサンスのころでもギリシャ時代でも、科学者と絵描き、建築家、哲学者、宗教家は同じだったんです。原理を追究するなかで絵を描くことが残ったのではないで

をつくったんです。成績がいいものは努力して、そうになっていることが多い。ですから、努力度はマイナスに評価するわけです。その結果、いく通りの分析をしても、絵が残ったんです。私は努力したら、絵を描く能力があるかもしれないと、気づきました」

堀さんはなるべくして画家になった気がしますね。

「人間がどうして絵を描くのだろうと、90を過ぎて考えますと、画家とか芸術家というのは、このごろのことであつ

しょうか。絵は結果なんです。排泄物みたいなものですか」

「なぜ絵を描いているのかというのは本人がよくわからないんです。90歳を超えても、どうして私みたいに飽きつばい人間が絵だけは飽きなかったのが不思議です。とても原始的なものだと思います。まだ文字も言葉も生まれない時に人は何かを刻んだり記録してたりしていたんじゃないでしょうか」

堀さんは60年に外交官のご主人を亡くしてから、古代から世界の歴史をたどる海外旅行に出かけるなど、1カ所にとどまらない暮らしが始まりますね。

「それは私の生き方の一番大事なところなんです。ものに慣れてくると、ものをよく見なくなってくるんです。知ったかぶりになります。なるべく驚いている状態、不安な状態にいるのがよくて、1カ所と同じものを見つめていると感性が鈍ります。小さいときに初めてものを見たときの驚きは90歳になっても残っています。その感動に近づくために、なるべくものに慣れないようにしているの、同じところに住まないで決めたわけです」

(2012年8月30日、東京・千代田のグランドアーク半蔵門で。文・相川浩之)

「同級生と運命的な出会い」石川 「挫折と背中合わせの青春」森本

森本毅郎さん（キャスター）×石川次郎さん（編集者）

NHKキャスターとして人気を博した後、独立。今もレギュラーのテレビ、ラジオ番組を持つ森本毅郎さん（高校10期）。マガジンハウスの人気雑誌5誌の編集長を務めた石川次郎さん（高校12期）。お二人は同時期に富士高に在籍。ユニークな高校時代を過ごしていた。

——お二人とも第1志望は西高だった。

森本「第2志望の男子を富士がとるようになって最初の年だったと思います。僕は西に落ちて富士に入ったんです。僕の家は7人兄弟で上の姉二人が第五高女卒業。『あんた、なんで女の学校に行くのよ?』と言われました。実際、入学したら男子約100人、女子約200人でした。ただ、女の子がたくさんいる学校って実は悪くなかった(笑)」

石川「西高で合格発表を見たら見事に落ちていて、その足で富士高に入学手続きに行きました。家は7人兄弟で上は姉ばかり6人。父親は亡くなっていて、女性ばかりなんで

す。家でも学校でも女性ばかり。卒業した高井戸中学の女性十数人が富士にいて、『どうしたの、次郎くん? 何でここにいるの?』とからかわれました。僕はぐれそうになりました」

森本「僕は、あつという間に軟派になりました(笑)」

石川「僕が1年の時に森本さんは3年でとても目立っていた。放送部にいて、いつも白いワイシャツを腕まくりしてオープンリールのテープレコーダーを持って渡り廊下を歩いていました。その頃から放送の仕事をしなかった?」

森本「いや、放送を将来自分の仕事にしようとは全く考えていませんでした。生徒会の会長をしていたので、生徒会の報告をしようと思って始めたんだと思います。僕は『校友』（第32号）の編集もやっていました」

石川「午後、体育館で汗まみれでバスケットボールの練習をしていると、森本さんたちがステージでハワイアンバン

ドの練習をしている。アロハシャツを着て。先輩がハワイアンならこちらはウエスタンだと、仲間とカントリー&ウ

エスタンのバンドを作りました」

森本「ハワイアンバンドは仲間と作って、勝手に体育館で練習していました」

——お二人は、どんなきっかけで今の仕事に?

石川「実は僕も編集者になるなんて全く考えていなかった。同級生で清水八千代という女性がいたのですが、卒業してから『うちの父と会ってくれない』と連絡があつたんです。父親の清水達夫さんが平凡出版(現・マガジンハウス)の副

社長で、若者向けの新しい週刊誌を創刊するから話を聞きたいとのことでした。率直にいろいろな意見を言いました。それで64年に創刊されたのが平凡パンチなんです。『君、雑誌の編集に向いているかもしれないよ』と誘われました。そのときはお断りしたのですが、それが後に雑誌を作る側に行くきっかけとなりました」

森本「大学は浪人して慶応大学の文学部に行きました。就職試験では新聞社を受けようと思った兄(ジャーナリストの故・森本哲郎氏)が『俺が新聞社にいるんだからおまえは放送局でも受ける』というので民放もNHKも受けました。ディレクターや記者になりました





森本毅郎（もりもと・たけろう、高校10期＝1958年卒）キャスター。39年東京生まれ。63年慶應義塾大学文学部卒業後、NHK入局。80年4月から『ニュースワイド』キャスター。84年NHK退職、フリーに。『噂の！東京マガジン』（TBS系テレビ）、『森本毅郎・スタンバイ！』（TBS系ラジオ）に出演。

かったのですが、大学推薦が必要。推薦してもらえる成績じゃなかったから、仕方なく一般公募だったアナウンサーの試験を受けたんです。兄は局に入ってから担当変更を希望すればいいんだから、と呑気にアドバイスしてくれましたが、実際は担当変更はしてもらえず、10年間、アナウンサーとして地方の放送局を転々となりました」

石川「ある時、NHKの美術の番組（女性手帳）を見ていたら森本さんが出ていました」

森本「東京に戻ってきて、担当した『女性手帳』は視聴率が1%あるかないかの番組でしたが、中身は濃かった。その頃、大型ニュース番組を立ち上げるというので準備委員会のメンバーになり、いろいろ検討しているうちに、お前、司会やれと言われて、朝のニュース番組に出ることになったんです。4年やった後、パリに特派員として行けと言われました。放送記者になりたくて入ったんですから喜んで

ングで『ポパイ』のアイデアをひっさげて出戻りますね。

石川「先輩の木滑良久さんと二人で作りました。男性雑誌にはパターンがあり、ヌードがあり、映画や車の記事がある。『ポパイ』はそれを全部やらないと宣言しました」

——その後、『ブルータス』を創刊されました。

石川「『ポパイ』卒業生をすくい上げる雑誌です。『ターザン』『ガリバー』も編集長として創刊しました」

森本「雑誌の編集長の代名詞みたいな人ですね」

石川「森本さんも、新しい時代のアナウンサーだった」

森本「いや。アナウンサーらしくないと言われ、不遇だった（笑）。ニュースワイドに出ていた時も長髪だったので、『なんだあいつは』という投書がたくさん来ましたよ」

石川「森本さんが異端だったという感じ、よくわかります。異端っていう人種も必要なんだと思います。そういう気分って高校時代の3年間に育まれた気はしませんか」

森本「僕は国語の秩父良子先生（本科7期）の影響が大きかった。秩父先生は国語の時間によくものを書かせた。書いたものからこちらの性格や指向を分析してくれた」

石川「僕が一番好きだったのは美術や体育の100分授業。体育は安覚（安藤覚）さんが忘れられない。お前らは女性の多い学校に入ってしまったんだから体育の時間は1年中、

いいはずなんです、それまで長い間、アナウンサー仲間と新しいアナウンサー像を模索してきたのに、突然放送記者になるのは何だか仲間を裏切るような気がして。結局、NHKを辞めました」

——石川さんは、まず、どんな仕事に就いたのですか。

石川「平凡パンチが創刊された64年は大変な年で、東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開業しました。でも、海外旅行の自由化というニュースに何よりも興味がありました。時代が変わるなと思う、海外旅行専門の代理店に入りました。添乗員をしましたが、それが嫌だった。目の前に見たい街があるのにお客様の面倒を見なければならぬ。これは違うと思う、2年で辞めました。その時、平凡出版の清水さんがうちの会社に入って海外に行けばいいじゃないかと言っていたのを思い出して、会いに行ったら笑いながら入れてくれた。最初の仕事が海外取材でした。それからずっと、会社を辞めるまで海外に向いて仕事をしていました。清水さんは、戦後の日本人の娯楽誌『月刊平凡』を作り、『週刊平凡』『平凡パンチ』『anan』を作った。世の中に存在しないものを作るのが我が社の仕事と言っていた。とても難しかったけれど面白かった」

——一度、平凡出版を辞め、清水氏が社長になったタイミ



石川次郎（いしかわ・じろう、高校12期＝1960年卒）編集者。41年東京生まれ。早稲田大学商学部卒。海外旅行の代理店に就職。66年平凡出版（現・マガジンハウス）に入社、『平凡パンチ』の編集を担当。76年『ポパイ』の創刊に携わり、その後、『ブルータス』『ターザン』『ガリバー』を編集長として創刊。

ラグビーやっていろ、と言われ、その通りになった」

森本「今考えると、挫折と背中合わせの青春時代を過ごせたのがよかったのかもしれない。受験に失敗して入った富士高では自分を含めて人間の弱さが理解できるようになった。俺が俺がとふんぞり返ったり、俺は正しいと居丈高に主張したりするのはなく、世の中いろいろな見方や価値観があるのだという姿勢を富士高で学びましたよ」

——石川さんは「俺が、俺が」にならなかったのですか。

石川「雑誌は一人で作れるものではないし、一人で作ったらつまらないものになってしまうでしょうね。周りの連中と一緒に面白がることをしないと雑誌なんかできないんです。船頭役はやりませんが、いかに面白い仲間を集めるか、環境作りに力を入れていました」

（2019年10月29日、カフェ・ド・ヴァリエテで。文・相川浩之、写真・落合恵子）

富士の自由に後押しされ やりたいことを仕事に

井出洋介さん（競技マージャンプロ）×小久保隆さん（環境音楽家）

東大卒業後、競技マージャンのプロとして活躍した井出洋介さん。自然音を生かしたリラクゼーション音楽の作曲のほか、携帯電話緊急地震速報のアラーム音なども手掛ける小久保隆さん。高校26期の二人を後押ししたのは、富士高校の自由な空気だった。

——お二人はどんな高校時代を過ごしたのですか。

井出「富士高の歴史の中でも、最も自由で、生き生きとしていた時代じゃなかったのかな。母は第五高女の生徒だったのですがとても規律が厳しい学校だったらしい。4歳上の姉は学校群制度がスタートした最初の年に富士に入ったのですが、まだ学生運動も激しかった。学校群制度も定着して、毎年30〜40人が東大に合格するようになる我々の時代は、勉強もしたが、クラスの仲間とよく遊んだ」

「富士は昭和25（1950）年に共学になってからも男女比が1対2くらいの時代が続いたのですが、学校群制度にな

なって、徐々に男女が同数になってきて、女学校のイメージが薄らぎました。しかも、我々は私服が許されていたので、私服を着てくる人も多く、見た目、教室がカラフルでした。それも『自由さ』を印象付けたと思います」

小久保「井出とは1年の時に同級で、井出が学校に自転車で行く途中に俺の家があったので、入学したての頃は学校までよく一緒に行きました。中学も一緒だった」

「思いつくのは放課後の活動。最初に管弦楽部に入りました。中学校の時はブラスバンドにいてサククスをやっていた。でも管弦楽にはサククスがない。そうしたらパーカッションをやる人間がいらないからやれと言われてやることになりました。合宿に行くと弦楽器や管楽器はパート練習が厳しい。打楽器はそんなにやることがないから、『お祭り担当』になった。パーベキューの段取りをするなど、部のた

めの遊びをコントロールする役割でした」

——小久保さんは、軽音楽部を作って、同時に活動する。

小久保「高1の時に好きなやつが集まってバンドをやっていた。鎌田洋一さんと津田治彦さんといったプロでも活躍した先輩もいた。正式な部じゃなくて、しかもうるさいから文句を言われる。何とかしなければと思った。それから顧問の先生をつけて、2年の時に何人かで立ち上げた」

「鎌田さんが音楽的な才能もあり精神的支柱だったんだけど、学生運動がきっかけで高校をやめてしまった。鎌田さんや津田さんはその後、H A Lというバンドを作ったり、ずっと活躍していて、付き合いが続いている」

——電気通信大学に入ったのはなぜですか。

小久保「シンセサイザーがやりたかったから」

——井出さんも初めは小久保さんとバンドをやっていた。

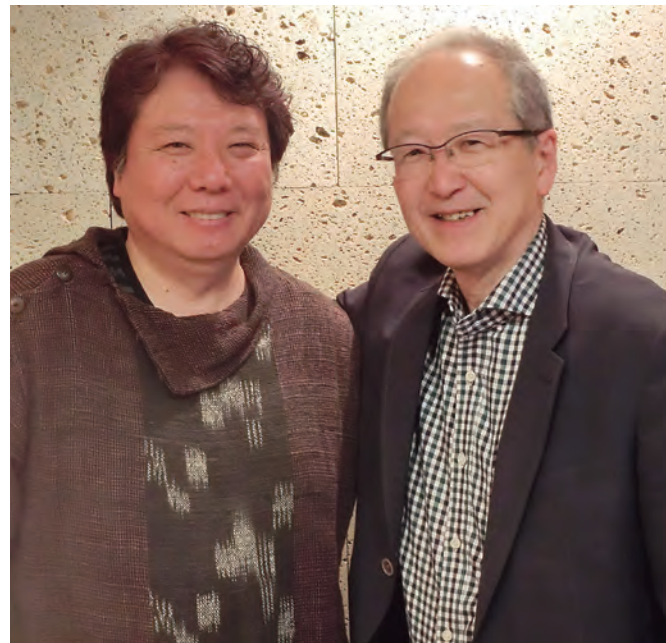
小久保「高校2年の時の文化祭のエマーソン・レイク・アンド・パーマーの『展覧会の絵』の演奏はすごかった」

井出「ギターとキーボードをやっていました。キース・エマーソンはすごいキーボード奏者でそれをどうやってごまかして似せるか苦労した」

「高校2年の後半くらいから友人のマージャン熱が高まり、大喜びで教え始める。僕は5歳からマージャンやっている



井出洋介（いで・ようすけ、高校26期＝1974年卒）56年東京生まれ。東京大学文学部卒業後、マージャンの競技プロに。卒論は「麻雀の社会学」。麻雀名人位（通算5期）、王座などタイトル多数。「賭けない」「（お酒を）飲まない」「（たばこを）吸わない」健康マージャンの普及活動に尽力。著書多数。





小久保隆（こくぼ・たかし、高校26期＝1974年卒）環境音楽家、音環境デザイナー、メディア・プロデューサー。56年東京生まれ。80年電気通信大学大学院中退。自然が持つ人の心を癒す力に注目し、現代人の心に優しく響くリラクゼーション音楽を作曲。携帯電話緊急地震速報のアラーム音などもデザイン。

から（笑）。高校3年になると固定メンツもできて」

「軟式野球部にも入っていました」

小久保「井出みたいに頭のいいやつは運動は苦手だったりするのには体育もちゃんとできるんだよね」

井出「大学の時は何をしようか迷いましたが、結論が出ないから、好きなことをやろうと思いました。バンドは、名人戦で3連覇した頃ははやっていたんだけど、その後、また始めました」

小久保「俺はあまり音楽を知らず、井出に教えてもらい、プログレ（プログレッシブ・ロック）にはまった」

「井出のやり方は効率がいい。無駄をしない」

井出「高校2年までバンドをやっていて、このままだとどこも進学できないという時に、基礎をしつかり勉強して、わかっていることだけは自信をもって答えられるように」

しようと思ったんです。わからない問題は堂々と捨てた。その頃から結構勝負強かった（笑）」

「マージャンも、早いリーチだったら、相手の待ちなんてわかりっこないじゃない。そんな時に悩んでも仕方がない。自分の都合で打つとか、迷いを少なくするのが大事」

——お二人はどちらが先に社会で芽が出た？

小久保「学生時代から稼いでいたから俺のほうが早いかな。音楽で食えるかどうかわからないから大学院にも進んだけれど、仕事が忙しくなって中退した」

井出「大学4年の時に、今、卒業すると食えないと思い留年した。その1年はマージャンばかりやっていて、自信がついて、卒論で『麻雀の社会学』を書いて卒業しようとした。そうしたら教授が『なんだこれは』という。補助論文を書いて卒業させてもらいました。麻雀の社会学はその後、麻雀新聞が取り上げてくれ、普通の人が僕のことやマージャンを理解するのに役に立ったと思います」

——プロとして暮らしていたのですか。

井出「東大卒のマージャンのプロとして有名になってしまったばかりに学習塾に通っている子供の親がクレームをつけ、続けられなくなり、雀荘でアルバイトをしたりして食いつなぎました。その時、賭けマージャンの世界は俺

の世界ではないなと思いました。そこで、原稿を書いたり

マージャン教室の講師を務めたりしました。女性たちがマージャンのイメージを変えてくれるかもしれないと思い女性マージャン教室には力を入れました。それが健康マージャンにつながってくる。マラソンの選手にならなくてもジョギングをみんながするように、多くの人が健康マージャンを楽しめなにかと考えました」

小久保「シンセサイザーが普及する中で、ヤマハで教室の講師をしたりしたのは井出と一緒に。シンセサイザーが使えるというだけでスタジオワークの仕事もどんどん来た」

——小久保さんは癒しの音楽を作っている。

小久保「YMOがヒットしてテクノポップがはやった頃、そうした音楽を作ってくれと頼まれて作ったのだけれど、楽しくなかった。30代前半、本気で自分探しをした。行き着いたのが自然の音だった。俺の中では社会と音、音楽の関係性を整えるというのが最終的なコンセプトなわけ。テクノポップがあつて情報過多になって脳が疲れる。この疲れを何とかしようというところにたどり着いた」

——地震速報の音作りなどの仕事もされている。

小久保「日常から非日常に一気に脳を変えなくてはいけないので、非日常を作ったんです」

——マージャンには年齢的な衰えはないのですか。

井出「ある能力は以前より衰えたということはありませんが、それをどういう能力で補うかという問題ですね。マージャンは心が折れたら負けるゲームなので、変な手を打ってしまつて負けたと思うと負けます。プロとして自分のパフォーマンスが出せなくなったらやめるべきと思います。まだ大丈夫だから現役を続けている。勝てばツキ、負ければ腕とずいぶん前から言っていていて、若い頃は戒めの言葉だったんですが、今は本当にそう思っています」

——小久保さんはこれから何に力を入れる？

小久保「今は映像もやっていて、これから映像と音楽を統合していく。最終的にはおもてなしの空間づくりに興味があります」

——富士高校の自由さがお二人の才能を引き出した。

小久保「社会にしていると自分が見えなくなっていく。そこに自由があるとモチベーションが湧いてそこに行こうとする。俺たちはエネルギーもあつたから行けたのだと思う」

井出「富士高が我々を止めることがなく行きたいところに行かせてくれたのだと思います」

（2019年5月9日、あづまで。文・相川浩之、写真・落合恵子）

臆することなく 法曹界を目指してほしい

高校22期・元検事総長
大野恒太郎さん



大野恒太郎（おおの・こうたろう、高校22期=1970年卒）52年東京生まれ。74年に東京大学法学部を卒業、司法修習生。76年検事任官。法務事務次官、東京高等検察庁検事長等を経て2014年7月、検事総長。16年9月に退官。森・濱田松本法律事務所客員弁護士。趣味は山歩き（現在も続けている）、読書、音楽鑑賞。

東京・霞が関の中央合同庁舎第6号館A棟の19階にある検事総長室を訪ねると、美しい海外の山々の写真が壁に飾られていた。「人生においてはワークライフバランスが大切。妻と国内外の山々に登り続け、国内の百名山はもとより、海外も南極以外の全大陸の山々に足を運びました」と、

2014年7月、検事総長に就任した大野恒太郎さん（高校22期）がにこやかに語る。検察官の仕事は忙しいが、仕事に負けず劣らず、家族や趣味を大事にする大野さん。検察のトップに上り詰めても「富士高生らしさ」は失っていないかった。

——奥様の佳津子（かつこ）さんは、高校3年の時の同級生。「クラスでは、しょっちゅう席替えがあつたのですが、そのたびに彼女の隣に座りました（笑）。彼女とは、大学卒業直前に結婚しました。すぐに生計を立てなければいけない

ずれにもなれますが、どうして検察官を選ばれたのですか。

「そのときは検事は人気がなかったのですが、アクティブで面白そうだと思います。検事が嫌になれば、いつでも弁護士になれるという気持ちもありました」

——なぜ人気がなかったのでしょうか。

「当時は、『反権力』『自由業』という点で弁護士に人気がありました。検事は給料は安く、転勤も多く、大変なだけと思う人が多かったようです」

——検察官というと、今の若い人は、木村拓哉主演のテレビドラマ『HERO（ヒーロー）』を思い浮かべるのではないのでしょうか。

「昔、放送された『HERO（ヒーロー）』は見たことがあります。検事個人の力量や正義感、取り組み姿勢が事件の処理に影響するというのは、番組が描いている通りだと思います」

「事件は、被害者を含めた当事者にとって、一生の一大事です。ですから、検事の毎日は真剣勝負です。検事になってすでに40年近く。仕事はきつくて大変ですが、やりがいがあり、退屈したことはありません」

「様々の事件を通して、いろいろな職業、いろいろな境遇の人に接しました」

ので、司法試験を受け、法律家を目指すことにしたのです。法律家になれば、世の中の役に立て、自分の人生も開けると思いました」

——法律が好きだったのですか。

「子どものころから理屈っぽいところがあつたので、法律を仕事にすることは自分に向いていると思って、東大法学部に入りました。でも、大学で法律を学んでいるときは、抽象的な話ばかりでつまらなかった。ところが、司法試験に合格し、司法修習生になると、法律が俄然、面白くなってきました。法律は具体的なケースに当てはめて、初めて生きてくるんです。こういう場合は、法的にどう解決するか……。いろいろな考え方が成り立ちます。それを1つひとつ考えるのが楽しかった」

——司法試験に合格すると、裁判官、検察官、弁護士のい

「拘置所の取調室で、夕焼けの西の空にそびえる富士山があまりに美しかったので、自分の父親くらいの年齢の被疑者に教えてあげました。二人でしばらく無言で眺めていると、彼が突然、泣き出しました。そんなこともある人間臭い仕事です」

——検察が対象にする事件は普通の刑事事件だけでなく、様々な法律違反の事件がありますから、大変ですね。

「様々な分野を勉強しなければなりません。たとえば、特捜部にいたときは証券取引や金融取引も勉強しました。また、検察の仕事（捜査、公判）のほか、法務省では、法務行政や制度立法も担当しました。司法制度改革では、内閣司法制度改革推進本部事務局の次長を務め、十数本の法律を成立させました。

その中で、裁判員制度の導入、法科大学院の創設、法テラス（日本司法支援センター）



の設立などに携わりました」

―― 捜査、公判では、どんな事件に関わられたのですか。

「東京地検特捜部時代には、東京佐川急便事件、金丸事件などに関わりました」

―― 自民党副総裁だった金丸信氏が東京佐川急便から5億円のヤミ献金を受け取りながら、政治資金規正法違反の罰金が20万円だったことに、不満を漏らす国民も多かったようですね。

「それで検察庁の看板に黄色のペンキを投げつけられたこともありました。その後、脱税事件で金丸氏を逮捕し、その公判も担当しました。地検特捜部には丸4年、続いて金丸事件の公判に1年従事しましたが、特捜部時代は土日もまったくないほどの忙しさでした」

―― 検事総長になられて、どんなことに力を入れるお考えですか。

「捜査公判の仕組みが大きく変わりつつあります。従来取り調べで自白を得た後、その自白を内容とする供述調書を裁判所に証拠として採用してもらうというやり方が長く続いてきましたが、こうしたやり方は日本だけのものでした。そして、時代が変わってきたことにより、もはや、そのようなやり方は通じなくなってきています。したがって、こ

れからは自白よりも客観証拠を重視する流れを強めていかざるを得ません」

「検察・警察の密室での取り調べが問題となり、取り調べの録音・録画（可視化）の対象範囲を拡大しています。そうすることになった根本の原因は、何よりも、取り調べや供述調書に大幅に依存した捜査に無理が生じていることにあると思います。だから、自白以外で証拠を集める方法も考えなければなりません」

「法制審議会（法相の諮問機関）が司法取引の導入などを含む刑事司法制度の改革案を答申しました」

「司法取引というのは、一定の企業犯罪や暴力団が関係することの多い薬物犯罪等において、実行犯に、『真実を話せば、起訴をしない、あるいは求刑を軽くする』というような約束をして共犯について正直に話をさせ、背後にいる首謀者に迫るやり方で、諸外国においては広く採用されている制度です。独占禁止法の改正で導入された課徴金減免制度（リーニエンシー）談合やカルテルを最初に申告した会



はありますか。

「どんな仕事でも組織の論理と自己の信念の折り合いをどうつけるかが問題になりますが、法曹界は、基本的に、正論、合理性が支配する世界です」

「民主国家において法秩序は市民生活や社会・経済の基盤です。司法制度改革により『社会生活における医師』としての法曹の活動領域は今後、ますます拡大し、国際化も進んでいくと思います」

「法律を学んで社会の役に立ちたいという志のある人は、臆することなく、法曹界を目指して、能力や個性を発揮してもらいたい」

「しっかりと法律を勉強するのは当たり前ですが、人間相手の仕事ですから、視野が狭く面白みのない人は伸びないと思います。法律以外にも、いろいろなことにチャレンジしてほしいです」

―― 法曹界で活躍されている富士高校OB、OGは多いのですか。

「検察だけでなく、裁判官、弁護士、法学の研究者として活躍されている人がかなり多いと思います。」

（2014年12月9日、最高検察庁で。文・相川浩之、写真・上瀧守）

「『取引』という印象は悪いのですが、正直に話をしたものが損をしないようにする制度だとも言え、事件の全容を解明したり、世の中をよくするといった正当な目的の実現のためには司法取引も一つの選択肢になると思います」

―― 裁判員制度などの司法制度改革の次に、検察改革に取り組まれようとしているのですか。

「未来志向の検察改革が必要です。これまでのやり方でも無理をすれば数年は持つかもしれないですが、20〜30年後までは絶対に持たない。裁判員制度の導入時は法務省、裁判所にも反対論が多かったのですが、司法制度改革を進めた結果、今や裁判員制度は良い制度として定着しつつあります。検察改革も屈せずに進めたいですね」

―― これから法曹界を志す、高校の後輩たちにメッセージ

『歩く六法全書』では 良き法律家になれない

高校23期・第19代最高裁判所長官
大谷直人さん



大谷直人(おおたに・なおと、高校23期＝1971年卒) 52年北海道生まれ。75年に東京大学法学部を卒業し、同年司法修習生。77年東京地方裁判所判事補。2015年最高裁判所判事に任命され、18年1月9日付で第19代最高裁判所長官に就任。好きな言葉は「人間は努力する限り迷うものだ」(ゲーテ「ファウスト」)

第19代最高裁長官に就任した大谷直人さん(高校23期)にお話を伺うため、東京・隼町の最高裁の執務室を訪ねた。机には、同期の野田收さんの新島ガラスを使った作品が飾られていた。富士高校の美術教師を長年務めた佐藤美智子先生の50年展(2015年)を開いたときも足を運び、受付まで手伝ってくれた大谷さん。三権の長という重責を担いながら、富士高校時代を忘れない姿に親しみを感じた。

——大谷さんはどんな高校時代を過ごしたのですか？

「ごく普通の富士高生でした。クラブ活動は最初、背が高かったのでバレー部に入ったのですが、向いていないことを知ってすぐにやめ、テニス部に移りました。でもテニスに打ち込んだわけでもない。生徒会活動もなかったのですが、クラスメート以外には知られていない存在だったと思います。最近は裁判官という仕事柄が同期生の中で珍しがられます。」

ということでしょうか。そう言えば、2年生のクラスで文集を作り、その最後に、20年後の某月某日に西郷さんの銅像の前で会いましょうというメッセージが書かれていたのですが、20年後のその日に多くのクラスメートが上野に集まりました。その後皆で今の新しい富士高の校舎を見に行ったのですが、図書室で、『魔の山』(トーマス・マン)の図書カードを見たら、私が最後で、そのあとは誰も借りていませんでした(笑)」。――

——高校時代のことをもう少し教えてください。

「担任は1年のときは数学の竹内庸雄先生。2年のときが国語の秩父良子先生。3年が国語の川島二郎先生でした。学校群制度が始まったばかりだったこともあってか、先生方には熱意を感じました。選択科目では美術をとったのですが、一番の良き思い出は、写生で(それを口実に)教室の外に出られたことかな(佐藤先生、申し訳ありません)。3年間クラスに恵まれ、楽しい時間を過ごすことができました」。

「服装は3年の時に自由になりましたが、結局標準服(学生服)を着ていました。いまどきの若い男子には詰襟はあまりはやらないのですが、その服さえ着ていればよかったので、私には気が楽でした」。

ますが、皆の先頭を切って走っているようなタイプの生徒ではありませんでした」

「でも、富士高の水はとても合っていました。いろいろな才能を持った友人たちがいたのですが、いい意味で、普通の高校だったのが良かった。勉強一筋ではない進学校、個性的な才能が揃っていることがその高校のブランドになると、かえって各自が、『個性的でなければならぬ』という使命感を背負わざるを得なくなる面もあるのでは？その意味で、富士高校は『目立とう』とする必要のない、自然体の雰囲気のある高校だったと思います。『こうしなければならぬ』というようなことを余り感じずにやりたいことをやれた記憶があります」

「私は、比較的本をよく読んだ方だと思っています。岩波文庫で言えば、黄色の帯(日本の古典)を除く全般のジャンル

「中学校は杉並の神明中学でしたが、32群に合格したクラスの男子の中で、私だけが西高ではなく富士高で、『女子生徒が多いから男子は昼休み校庭の隅の方に追いやるべし』と『言われたものでした。もちろんフェイクでした。むしろ、自然体の高校生活だと感じられたのは、女子の皆さんの健全なパワーのおかげのようにも思っています」

「もともと、当時の社会状況を反映し、3年間を通じて、卒業式のボイコットといった出来事はありました。特に3年生のときは、どうすべきか私なりに悩んだものです」

——東大法学部を目指したということは、将来、裁判官になろうと高校時代に思ったのですか。

「いえ。裁判官になるなんて思ってもみませんでした」



た。司法試験に受かった後、当時は司法研修所で2年間の修習を受けたのですが、4分の3以上が過ぎた段階になって、裁判官を志望しようと決めました」

——司法試験は受けようと思っていたのですか。

「高校時代には、自分の将来の職業までイメージすることはできませんでした。法学部を受けたのは、政治学のコース選択や転部など、教養学部後の選択肢が広いと思ったからです。法学部をどうしてもやりたいというわけではありませんでした。企業に就職することも考えましたが、結局司法試験にチャレンジしました。正直言つて余裕は全くなく、半年余りは必死に勉強した記憶があります。起きている間は勉強しているという感じでした」

——なぜ裁判官を目指すことになったのですか。

「司法試験を受けるときは、漠然と『弁護士になろうかな』と思っていました。社会派のテレビドラマ『判決』が好きで、仲谷昇、河内桃子(若い人たちには???でしようか)らが演じる弁護士像が魅力的だったので、今でいう『町弁』が頭にあったと思います。

そうしたドラマでは裁判官が主役を演じることはなく、今でも静止画像みたいな感じで出てくることが多い(笑)。たしかに、弁護士、検察官と比べると、画像的には、派手

さはない。でも、修習を通じて、頭の中ではダイナミックにいろいろなことを考えている職業であることが分かってきました」



「裁判は法曹三者(裁判官・検察官・弁護士)で成り立っているのだから、法律家を目指す以上、裁判官も一つの選択肢と思うようになったということになりました」

「もつとも、正直なところ、スタートの時点で『この道一筋』というような覚悟ができていたとはいえないかもしれません。東京地裁が最初の職場でしたが、初めて法廷の裁判官席に座ったとき、布施明の歌(『落ち葉が雪に』)の一節『どうして僕はここにいるのだろう』が頭をよぎったのを覚えていました」

——裁判官は面白い仕事ですか？

「裁判所は、紛争、事件を解決・処理する機関です。裁判官は、刑事裁判だけでなく、民事裁判でも、人の一生を左右する判断をしなければならぬので『面白い』という言

葉を使うのは適切ではないかもしれませんが。ただ、『やりがい』の前提として、この仕事に『興味』がなければならぬ

ことは間違いありません。そういう意味で言うと、人間や社会に対して強い関心を持っていることが求められるように思います」

——最高裁判事局長として裁判員制度の立ち上げに携わったそうですね。テレビドラマで、裁判員たちが老練な裁判官に丸め込まれているような場面がありました。そんな危惧はないのですか。

「裁判員を丸め込もうなどと考える裁判官はいないと思います。裁判員の皆さんは、真摯に裁判に向き合い、納得のいく結論に至ろうと努力してくれています。裁判官にそんな底意が感じられたら、即座に強い拒否反応が出るのだと思います。裁判員裁判での裁判官の在り方についてはいろいろな意見があるかと思いますが、裁判官が裁判員へのリスベクトを持つと一緒に仕事をしているという現実を出発点とした議論をしてほしいと思っています」

「裁判が終わると全事件で裁判員の皆さんにアンケートを行っていますが、制度実施以来裁判員を経験した人の9割以上が『やってよかった』と答えてもらっており、裁判員制度は相応に安定的に運営されているのではないでしょう

か」

「しかし、これからも裁判官が誤解されないように緊張感を維持していくことは欠かせないと思います」

——若い後輩におっしゃりたいことはありますか。

「高校を卒業して2年もするとくじで裁判員に選ばれる可能性があります。まずは、皆さんに、我々が生きているこの社会について、大いに関心を持ってもらいたい。その上で、裁判の仕組みや実際の裁判にも対象を広げてもらいたいです。できれば、ぜひ裁判の傍聴を体験してください」(詳しくは、裁判所のホームページ <http://www.courts.go.jp> の『見学・傍聴案内』をクリックしてみてください)

「そして、法律家という職業にも目を向けてほしい。よく『六法が頭に入っているなんて、すごいですね』などと言われます。法律家というのと、『歩く六法全書』みたいなイメージを持たれるのですが、そんなことはまったくありません。むしろ、そういう詰め込み主義で頭の硬くなつた人は法律家として活躍できません。固定観念にとらわれずに、柔軟に現実を見ることに興味のある人こそ、法曹界に加わってもらい力をふるってほしいと願っています」

(2018年3月22日、最高裁で。文・相川浩之、写真・落合恵子)

白衣

かつて白衣が制服化していた時代がある。学園紛争後、1970（昭和45）年に私服が認められた。普段着となった校内で、本来化学の実験に着用するとして購入された白衣が、化学の時間以外にも日常的に羽織られていたのである。卒業生にFacebookで白衣の着用について尋ねたところ、日常的に着ていた時期は昭和47～56年頃がピークとわかった。

寒いからとか、美術や書道で汚れるからとか、休み時間にバレーボールで汚れるからとか、実用性が重視され、日々着ているうちに、校内で制服化していったのではないだろうか。そののち、美術部員が始めたのか、白衣をキャンバスに絵を描く人、墨痕鮮やかに筆書きする書道家、英文字でサインを走らせる人も出てきた。

白衣は医学生のような清潔さというよりも、汚れを防ぐための割烹着のような存在であり、自己表現の道具でもあった。（榊原）



昭和48年の休み時間

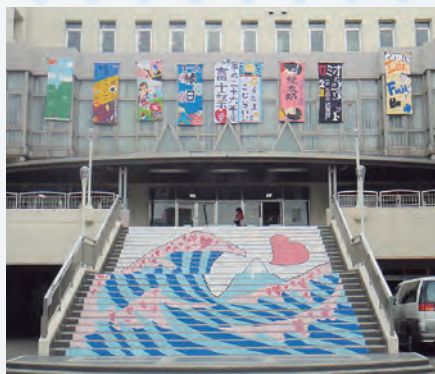
シンデレラ階段

1990（平成2）年に現校舎ができ、2階の玄関につながる正面階段がいつしかシンデレラ階段と呼ばれるようになった。

田辺純一さん（高校53期）によれば、「この階段の蹴上部に絵を描き、階段の一番下から最上部までを一枚の絵に仕立てた作品が平成11年の文化祭に初めて登場した」という。

代々美術部が文化祭の装飾を担当していて、以前は「門」など立体物が定番であった。平成11年の担当となった美術部員、西崎大河さん（高校53期）は立体物よりもイラストが得意であった。「自分の強みを生かし、何か革新的な作品を作れないか」との考えから生み出されたのが階段装飾だった。大きな絵を階段に合わせて短冊状に切り離し、一段毎に貼りつけて仕上げていった。

以来、シンデレラ階段の装飾は、文化祭の定番となっているし、最近では北門の階段も装飾されるようになった。（榊原）



平成26年 文化祭

プール

富士高校に初めてプールが出来たのは、1954（昭和29）年9月。完成には10か月かかった。プールの整地には作業員に加え、高校7期の男子生徒が体育の時間の大半を使って協力した。イチヨウの大木の移植作業や、穴掘り工事などに汗を流して頑張った。

プールの仕様は、短水路縦25m、横13m、6コースで、最深部3m。高さ3mと1mの飛込台がついていた。神宮外苑プールや日大、早大、東大などと並んで、都内都立高校唯一の公認プールとして、水泳連盟より許可を得たという。翌年6月のプール開きには、元オリンピック選手古橋広之進氏らが招かれた。また、別の日には「世界記録に挑む会」が開かれ、有力選手が参加し、7つの世界新記録が生まれた。

体育の授業では高飛込台から、全員が足からでも飛びこまされた。当時でも、高飛込台のあるプール設備は希少であった。

現校舎では武道場の屋上にプールがある。富士のプールは話題性に事欠かない。（榊原）



初代プール

天文台

学生時代は足を踏み入れたことのない謎の場所だったが、天文台が学校選びの決め手となった人もいる。1961（昭和36）年、旧校舎の誕生と同時に天文部が創部された。新旧両方の天文台を経験した天文部部长、久世智さん（高校44期）は、「ドーム回転は手動から自動になり、口径15cmの五藤光学研究所の屈折望遠鏡も健在」という。

活動は夜だけと思いきや、昼は太陽の黒点観測や天気図の作成を行う。文化祭前はプラネタリウム作り。プリンカップ利用の夕焼け投影機、星座投影機などすべて自作。投影機は30cm樹脂半球を黒く塗装し、星の穴をあける。大きさは西高に啓発され、翌年は直径50cmに。番組はカセットに音声とBGMを入れてドラマ仕立てにした。

月1度、学校で行う徹夜観測では、天文台の望遠鏡で惑星の観測をし、屋上で天体写真撮影などをする。唯でさえ星の見えにくい都会の空で、天候不順も多かった。夏合宿は、高気圧の安定した時期をねらい、星空を求めて信州などへ出かけている。（榊原）



太陽の黒点観測

グローバルに活躍し いろいろな分野に挑戦

高校29期・コメダ社長
白井興胤さん



白井興胤（うすい・おきたね、高校29期＝1977年卒）58年松山市生まれ。高校時代は軟式テニス部。83年一橋大学商学部卒。三和銀行入行。93年セガ・エンタープライゼス（セガ）入社。2006年日本マクドナルド最高執行責任者（COO）。08年セガ社長。13年コメダ社長、14年コメダホールディングス社長。

「教師が出前をとるのに生徒がとって何が悪い」と高校時代、教室に出前をとって怒られたという逸話があるコメダ社長の白井興胤さん（高校29期）。「グローバルに活躍したい」「いろいろな仕事をしてみたい」と、常に、常識にとらわれず、新しい職を求めてきた。

――高校時代を振り返ると――

「勉強も、友達と遊ぶことも、あらゆる分野で初めてのことがたくさんあって、中身がすごく濃かった。女性の場合は小学生くらいから大人になり始めるけれど、男性の場合、高校時代から一気に大人に駆け上がる」

――大人になってからも波瀾万丈です――

「26歳の時に結婚して5年で離婚。再婚してからこの前20周年を迎えました。子供は32歳から13歳までいます」

「離婚した1年後に三和銀行を辞めました。母は最初の子

房を気に入っていましたから、『離婚して今度はゲーム会社に行く？あなたの人生は終わったわね』と言われました（笑）。父は『いいんじゃないの』と言っていました」

「当時はビジネススクール（カリフォルニア大学ロサンゼルス校経営大学院）と現地法人の5年間に及ぶロサンゼルス駐在から帰国。頭取直下の企画部政策班の所属になり、あらゆる政策決定に関わっていました。中期計画を立てる時は毎日午前1時～2時まで食事もせずに働いていました。しかし、日本の銀行は護送船団方式といわれ、どんぐりの背比べ。グローバルでは戦えないと感じ、名物経営者がいて、世界にテーマパークをたくさん作ろうとしていたセガに魅力を感じました」

「当時、セガは中途採用を中止していたのですが、中山隼雄社長に手紙を書いたら食事をしようということになり、

その場で採用が決まりました。37歳で取締役になりましたが『会社の金は自分の金と思って使え。海外に行くときはビジネスクラスに乗らずにエコノミーに乗り、浮いたお金で部下を連れていけば金は生きる』と中山社長に言われました。彼からビジネスの基本を叩き込まれました」

――後にセガの社長になるまで、いろいろな経歴をする――

「セガを辞め、シリコンバレーでベンチャーキャピタルの真似事をした後、ナイキジャパンに入りました。その後、日本マクドナルドの最高執行責任者（COO）に。ナイキ以降はヘッドハンティングで仕事を変えました。セガの激烈な経営者と仕事をした経歴が魅力だったようです」

「ナイキジャパンの次の社長は自分だと思っていたら米国から社長が来ることになりブチ切れていた時に、社長を助けるCOOのポストを用意するという話が米国のマクドナルド本社からあり、日本マクドナルドに移りました。飲食業は経験がなかったので、入社する前に夜8時から12時までマクドナルドでバイトをしました。19歳のバイトがお客様の目線に立ちながらしつかりと指導してくれる。ここならできると思いました。天職を得たと思いました」

「しかし、パチンコ・パチスロ事業のサミーの傘下に入っていたセガから誘いを受けました。以前セガではCS（コ

ンシューマー用）ビジネスに携わっていましたが、もともとセガのAMビジネス（ゲームセンターの運営及び業務用ゲーム機の開発、製造、販売）に興味があったので、セガに戻りました。1年後に全体を見る社長に就任しました」

――コメダの社長になった理由は――

「日本マクドナルドの元部下に聞いたら、『外食の中では白井さんがやりたいと思っている人間でなければできないサービス』ができる店』というのでやることにしました。創業者の加藤太郎さんが素晴らしいモデルを作った。居心地の良いソファ、新聞読み放題、モーニングサービス――。そういったものでくるまれている『空気感』が支持されている。この空気感を磨いていきたいです。木曜日の朝は現場に出てコーヒーをいれています」

（2018年12月21日、東京・千代田のコメダ東京事務所で。

文・相川浩之、写真・落合恵子）



「米国留学でーTのパワーを知る」謝敷 「独立しデジタル社会を生き抜く」校條

謝敷宗敬さん(日鉄ソリューションズ前社長)×校條浩さん(米NSVウルフ・キャピタル代表)

情報システム大手、日鉄ソリューションズの前社長、謝敷宗敬さん。米国で新興企業を支援している校條浩さん。高校24期の同期である二人は、時代の最先端を行く仕事をしているが、その道のりは必ずしも一直線ではなかった。

——二人は富士高校でサッカー部だった。

謝敷「ただ、ボールを蹴って、ボールを磨いていました。『白い歯を見せるな』、『水を飲むな』と言われ、うさぎ跳びなどの体力強化に励んでいました。いま考えると、サッカーが強くなるためにゲームをどう組み立てるかなどの体系的な指導があればよかったのと思います」

校條「米国に移住して、それまで疑問に思っていたことが払拭されました。水を飲んでもいい、うさぎ跳びは膝に悪い、それにスポーツは専門のコーチが教える——ということが分かった。あの頃は何だったんだろうというのが確かにあります(笑)。サッカーは大好きでテレビでむさぼるよ

うに見ていたけれど、僕は体力がなかったのでクラブ活動のサッカーは楽しいものではなかった。娘は米国の学校に通いましたが、米国では、体力がなかったり運動神経がよくなかったりする子でも専門のコーチが上手に教えてそれなりに花が咲くんです」

——二人はどんな高校生だったんですか。

校條「高校生活はサバイバルでした。学校も落第せず、好きなサッカーもやる。サッカーの練習をすると死にそうに疲れて勉強なんかできない。家に帰り夕食を済ますと午後8時。すぐに寝て4時頃に起きて勉強しました。主要科目と雑科目に分けて主要科目だけに集中して、雑科目は捨てました。今の言葉でいうと「選択と集中ですね(笑)」

「将来どんな仕事をするかはまったく見えていなかった。でも、英語ははじめに勉強したかな。受験のための英語は興味なくてラジオ英会話を聴いていました。謝敷君は帰国

子女だったので国際感覚があったけれど、僕は国内で育ち、なぜ英語の勉強に駆り立てられたのかは不思議です」

謝敷「学校群になって間もないから女性と男性の比率が4対3くらいだった」

校條「その後男女が同数になるけれど、女性が多いほうが

特長があつていいと思います。5歳上の長兄が西高出身なんです。僕も西高に行きたいと思っていたら学校群制度になって富士に回された。うなだれて入学したんです。でも1週間くらいで気持ちが変わって。こんないいところに入れば本当に良かったと思いました。毎日がサバイバルでしたが、女性に精神的に助けられた」

謝敷「男女比が7対3みたいなところはきついなと思うな。サバイバルが余計きつくなる」

校條「社会に出てから思い出しても富士の女性には自慢です。米国に行つて女性が活躍するのを見ても、富士の経験があるから何の違和感もありません。女性たちは賢くて大人でした。男性を上手に立ててくれる子が多かった」

「西高とサッカーの試合をしてぼこぼこにやられるんだけど、女性たちは応援してくれる。家庭科で料理の授業があると『食べて』と言つて、必ず、料理を持ってきてくれるんですよ」

——人気があつたんですね。



校條「ちやほやしてくれただけで。彼女たちには別に付き合っている人がいたりするんです(笑)」

謝敷「同級生同士で結婚したやつは多いよね」

——付き合っている男女は多かったのかもしれない。

謝敷「優先順位の付け方が間違っていたかもしれない(笑)。僕はラジオを作ったりするのが好きでした。秋葉原に部品を買いに行ったり。そんな時間があつたんですね」

——本当は理科系が向いていたのでは。

謝敷「物理や化学は好きだったけれど、全体を大きく見ることが好きでした。ブルーバックスはほとんど読みましたけれども、細かい計算問題を解くのは面倒だなと思ってしまつて。やたらにできる人が周りにいて、こっちでは勝てないなと思つたのも文系に行つた理由です(笑)」

「大学は経済学部。物作りに興味があつたのと海外に行つてみたいという気持ちがあり、新日鉄に決めました。入社するとなぜか経理部に配属された。大学の時は会計学は何のためにこんなことをするのかさっぱりわからなくて関心を持てなかつたのですが、会社に入つたらすぐわかつた(笑)。経理はテクニクで、グローバルで共通する言語だから、向こうの言っていることがよくわかる」

「当時は鉄の事業が曲がり角で、新事業に乗り出すことが

この会社を将来は引つ張つて行こう、という気概に溢れていた時期で、朝から夜遅くまで仕事に没頭していました。

ある時、たまたま『デジタル技術の性能は倍々のスピードで向上する』という法則を知りました。それをカメラの画質に適用して計算してみたら、30年くらいの間に写真フィルムの画質をデジタルカメラの画質が上回ることが分かり、衝撃を受けました。自分が一生捧げようと思つていた会社の根幹が崩れるかもしれない。役員にデジタル分野に乗り出す準備をしなければだめだと直談判しましたが、取りつく島もない。その中で数人の経営幹部がこつそりと相談に乗ってくれ、米MITに留学することができました。その頃、三菱電機で黎明期のIC事業を担当された方が会社に入社され副社長になっていました。相談に行つたら、私のような若造のビジョンを後押ししてくれました」



謝敷宗敬 (しゃしき・むねたか、高校24期) 1953年生まれ。77年東京大学経済学部卒。新日本製鉄(現・日本製鉄)入社。87年コーネル大学経営管理学修士課程修了。2000年金融システムソリューション部長。02年新日鉄ソリューションズへ。12年同社社長。19年日鉄ソリューションズに社名変更、取締役相談役。



校條浩 (めんじょう・ひろし、高校24期=1972年卒) 54年生まれ。東京大学理学部卒、同修士課程修了。85年米MIT工学修士。小西六写真工業(現・コニカミノルタ)で研究開発に従事。BCGを経て91年にシリコンバレーに移住。ベンチャーキャピタルを立ち上げ、米国のベンチャー企業と日本企業を支援。

検討されていたけれど、自ら取り組まずM&A(合併・買収)を検討した方がいい場合もあると思いました。そこで、85年に米コーネル大学に留学して企業買収を学びました。留学しているときにパソコンが使われるようになり表計算ソフトを知りました。当時はジャパンアズナンバーワンなどと言われていたけれど、日本は負ける、と思いました」

「帰国して配属されたのが新設されたエレクトロニクス部門。いくつかの企業の買収を検討しました」

——校條さんは東京大学の理学部に入学した。

校條「高校時代はサバイバルだけで精一杯だったので、大学1、2年は自由な生活を謳歌しました。3年になってから化学科に進み、修士課程を修了しました。小西六写真工業(現・コニカミノルタ)に入り、研究開発部門に配属され、主力製品である写真フィルムの改良研究をしていました。

「後日談ですが、留学から帰国して、真つ先に副社長に挨拶に行つたら『お前、帰つてきたのか。優秀なやつはだいたい帰つてこないものだ』と言われました。それで『しまつた』と思いました(笑)」

「その後、デジタルの世界を展開するには技術だけでは足りず、事業を起こし、拡大するための経営戦略が重要であることを痛感するようになります。その頃、たまたまボストンコンサルティンググループ(BCG)から声がかかりました。『ビジネススクールで経営戦略を勉強したら2年かかる。うちに来たら勉強ができて、給料まで出ますよ』と誘われ転職を決めました」

「そこで修行をした後、91年にデジタル世界の総本山であるシリコンバレーに飛び込むことになりました」

——お二人とも、一直線に進んできたわけではない。

校條「人生って計画通りにはいかないものです。これおかしとか、こちらに行きたいとか、いろいろ動いているうちに、世界の流れに乗っていくんだなと思いました」

謝敷「企業に入ったら、いろいろなことを経験してみるこれが大事です。それで、初めて道が見えてくる」

(2019年8月30日、あづまで。文・相川浩之、写真・芳根聡)

「米国留学で研究者魂を学んだ」佐藤 「後輩に20年間の経験を伝えたい」加藤

佐藤隆一郎さん（東京大学大学院教授）×加藤尚志さん（早稲田大学教授）

令和元（2019）年の紫綬褒章を東京大学大学院農学

生命科学研究所教授の佐藤隆一郎さん（高校27期）が受章した。コレステロール代謝に関する研究でノーベル賞受賞の米国人教授二人に師事、現在は健康寿命の延伸を食品機能で達成する応用研究に努めている。高校1年の時の同級生で、キリンビールで遺伝子組み換え技術による製薬などを手掛け、現在は早稲田大学教育・総合科学学術院教授を務める加藤尚志さんと、縦横無尽に語り合ってもらった。

——二人は1年A組の同級生。

加藤「隆一郎は、周りから見ても明らかにできる人だった。

僕は山岳部に入って、勉強する暇がなかった（笑）」

佐藤「理系の科目は好きだったけれど、国語と英語はダメでした」

加藤「隆一郎の父親は経済学者でしょう。なぜ理系に」

佐藤「職業としてアカデミズムの世界には憧れたけれど、

父と同じ分野では敵わないという気持ちがありました」

加藤「農学部に行ったのはなぜ？」

佐藤「農学にするか薬学にするか迷いましたが、生物化学幕開けの時代。農芸化学が一番自分に合うと思いました」

加藤「東大の農芸化学は醸造関係で歴史を作ってきたところ。僕はキリンビールの医薬開発の研究所にいたけれど、周りには東大の農芸化学の人がいっぱいいました」

——加藤さんは、キリンビールに入ったのに生物学や医薬を研究する道を進んだ。

加藤「よく『なんでビールつくっていないの』と言われた（笑）。僕はいつも傍流にいます。富士高校の3年の時は文系のクラスにいたのに理系に進みましたし」

「現役では文学部を受験したのですが、全部断られました（笑）。その頃、考古学の方法論に興味を持つようになり、方法論を学ぶなら理系と思い、理系を目指すことにしました

た。富士高を卒業した5歳上の兄が『早稲田の教育学部なら生物は学べるよ』と教えてくれて、受験し、合格しました。大学2年の時に富士高の山岳部のOBとして後輩を引率して山に行ったら、後輩が死んでしまった。熱射病でした。命への関心は強くなり、しっかり勉強しようと思いました。亡くなった彼への義務だと思って、今でも毎年の生物学の講義で学生たちにその時のことを伝えています」

「イモリのホルモンの研究をしていた大学院修士の時にバイオテクノロジーという技術が出てきて関心を持ったのですが、大学ではまだ始まっていなかった。それで、先生に『企業に修行に行ってください』と言ってキリンビールに就職しました。その恩師には今でも感謝しています」

——佐藤さんは就職せずに大学に残った。

佐藤「博士課程が終わっても、すぐには職に就けず、1年ほど研究生として苦しい時を過ごしました。帝京大学薬学部で助手に採用されたのが転機になりました。日本人の食生活が豊かになり生活習慣病が社会問題になっていた頃にコレステロールを制御して動脈硬化を抑える研究をすることができたのです。助手で採用される半年前に、後にボスになる恩師（ジョゼフ・ゴールドスタインとマイケル・ブラウン）がノーベル生理学・医学賞を受賞しました。4年



後に手紙を送り、彼らの元で研究する機会を得ました」

「80年代半ば、留学先を決める作業をしていると、加藤君が新聞のキリンビールの全面広告に出ていました。自社の社員が海外で活躍しているという記事広告でした」

加藤「米国のバイオベンチャーと世界で初めて動物細胞を使ってエリスロポエチンという遺伝子組み換え医薬の創製に成功したので、こんな広告が出ましたが、そこまでは決して順風満帆ではなかったんです。医薬に進出すると聞いて、キリンビールの人事部を訪ねたら『イモリの研究をしているような人は要らない』と断られた。でも、『状況が変わったら連絡ください』と悪あがきして連絡先を残してきたら、後で声がかかった。キリンは新しい事業では欲しい人材を集められなかったのだと思う。キリンはバイオ医薬のトップ企業といわれて超狭き門になった。僕はバイオ第1期生としてうまく潜り込めたわけです」

「赤血球を増やしてくれるエリスロポエチンという薬を米国のバイオベンチャーと一緒に開発しました。その準備で東大の医学部で1年間、血液学の研究員として再生不良性貧血の患者さんの尿をいただいて抽出する研究をしました。その時に東大医学部の医師、研究者たちの優秀さ、凄さを知り、今でも良いお付き合いをしています。その後僕らよ

でしたので、それを明らかにしました」

「米国には4年間いました。日本の12年間に相当するくらい濃い経験でした。研究全体がシステマチックに進められていた。複数の研究補助員がいて、実験が効率的にできました。通常は2人のノーベル賞学者を7〜8人の研究者が囲む形でプロジェクトが進むのですが、僕のプロジェクトは、2人のボスと3人で議論して進めました。50歳だった彼らは『ノーベル賞をもう一度とるぞ』という勢いでサイエンスに臨んでいた。議論をしていると、虫取り網で夢中になって蝶を追いかける少年のような澄んだ目をしている。名誉職的な仕事には就かず、生活の大半の時間を真理の探究に充てている姿勢は素晴らしいと思いました」

——加藤さんは、カリフォルニア大学で成果はあった？

加藤「探している因子はついに見つからず、泣く泣く帰国しました。数十人のプロジェクトが4人に縮小されました



佐藤隆一郎（さとう・りゅういちろう、高校27期）
1956年生まれ。85年東京大学大学院農学系研究科修士。帝京大学薬学部助手、テキサス大学博士研究員、大阪大学薬学部助教授を経て、99年より東京大学大学院農学生命科学研究科助教授。2004年同教授。17-19年日本農芸化学会会長。19年紫綬褒章受章。



加藤尚志（かとう・たかし、高校27期＝1975年卒）
56年生まれ。80年早稲田大学教育学部理学科生物学専修卒、82年早稲田大学大学院理工学研究科物理学及応用物理学専攻修了。82～2002年キリンビールに勤務。遺伝子組み換えによる創薬に取り組む。02年より早稲田大学教育・総合科学学術院教授。

り先に成功したカリフォルニアアムジェンというバイオベンチャーと一緒に開発しました。日本に戻ってきて赤血球の後は血小板を増やす因子を見つけようということになって再度渡米してカリフォルニア大学のサンタバーバラ校で研究員として4年過ごしました」

——佐藤さんも留学する。

佐藤「二人のノーベル賞学者が共同研究しているテキサス大学に留学したいと思い、両先生のお役に立ちたいとエメールしたら、面白いから来いということになりました。世界中から優秀な研究者が集う組織で、得意な技術を持っていることは生き残るのに必須でした。そこで、離日前にバイオテクノロジーの技術を独学で習得しました」

「コレステロールが高いと動脈硬化になります。日本で開発された薬でコレステロールを下げることはできましたが、コレステロール代謝の詳細な制御メカニズムは不明のまま

が、仲間とゼロからやり直して、因子が見つかりました」

「ノーベル賞をとれるかもしれないと思いました。ところが、この因子を、我々を含め世界の4グループが同時に発見して、特許も同じ日か1日違いだった。苛烈な開発競争になってしまいました。だけど米国の臨床試験で活性を中和する抗体ができる例が発生して、原因不明だけど臨床開発は断念する憂き目にあいました」

「こうした20年間の企業での経験を若い人に伝えたいと思い『修行してきました』と早稲田大学に戻り、教育学部と大学院先進理工学研究科の教授になりました」

——佐藤さんは留学から帰国。

佐藤「米国留学では最先端の仕事ができましたが、教員として来てくださという話はなく、帝京大学に戻りました。半年後、阪大の薬学から助教授というお話をいただいた。4年後、東大に助教授として移りました。その後、食品生化学分野で公募があり、教授に就任しました」

「紫綬褒章は学問領域が記載されるので、私のようにいろいろな分野を渡り歩いた人間がいただけるものではないと思っていたので、受章には正直驚きました」

（2019年9月28日、えん酌で。文・相川浩之、写真・落合恵子）

高らかに発刊の辞— 初代白石校長の時代

関東大震災と校友創刊の経緯

第五高女において校友が産声を上げたのは、大正13(1924)年すなわち関東大震災の翌年でした。初代白石校長の発刊の辞には下記のような経緯が記されています。



初代校長・白石正邦

「かねてより創刊準備していたところ、資金の全額を大震災救済のために差し出してしまった。その後再び発刊円熟の境に到達し、記録部員の力を集結した結果がこの創刊号である。」

このとき第五高女は創立5年目。揺籃期を経てまさに隆盛期を迎えようとしていました。

「校友会」と校友雑誌

昭和初期の旧制中学および高等女学校には、校長を会長、生徒を会員とする校友会という学内組織がありました。その多くは機関誌を発行しており、第五高女の校友会においても同様の冊子の発刊が待たれていました。

「ああ気高き校友会誌」など、創刊号には生徒の喜びの声があふれています。表現の場が限られていた時代、作品や研究を発表できる雑誌を持つことは、生徒の憧れでした。

学校生活の紹介という使命

一方で、校友は学校生活の公式な記録という役割も担っていました。

「校友は決して単なる生徒の作文雑誌でも文芸雑誌でもありま



校友創刊号・口絵より

せぬ。本校の主義方針を社会に紹介し、内部に於ける各種機関はいかに動きつつあるかを知ってもらう使命を帯びているのです。」(創刊号編集後記)と意気軒昂です。その言葉のとおり、第五高女の隆盛と共に校友の内容も号を追って充実していきます。

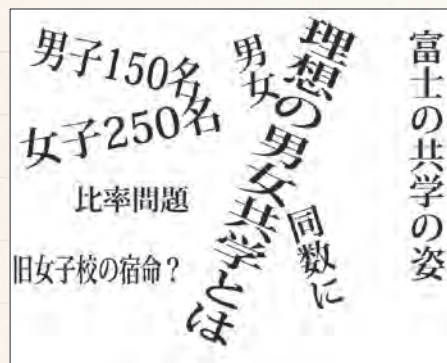
白石校長退職後に激動の時代へ

昭和14(1939)年の校友第18号は、「白石校長記念号」と銘打たれ、氏の退職を惜しむ声に満ちています。そして入れ替わるように第五高女に戦争の影が迫り、校友の運命も変転していくことになります。

(出典：校友創刊号/第18号)



理想の男女共学は 実現したか



昭和30年代の校友より

男女共学開始と新たな問題

戦後の学制改革により都立富士高等学校が生まれ、昭和25（1950）年、男女共学が始まりました。新しい風が吹き込む一方で、男女比率のアンバランスという新たな問題を抱えることになったのは旧高等女学校の宿命でしょうか。

女子が断然多いという実態

昭和20年代から30年代の校友では「男女共学のあるべき姿」が繰り返し取り上げられました。当時の入学者数の男女差は右上の表のような状況でした。

特に昭和35年度以降は男子が女子の約6割に留まり、そのために女子クラスを2つ設けざるを得ない学年もありました。このような共学の姿は不自然である

昭和(西暦)	男子	女子	男女差
25 (1950)年度 (共学開始)	100	150	50
35 (1960)年度	150	250	100
38 (1963)年度	165	289	124
42 (1967)年度 (学校群開始)	171	270	99

として、校友のアンケート「富士に望むこと」の筆頭に男女同数が挙げられています。

学校群制度導入と男女差の解消

学校格差是正の目的で昭和42年度から導入された学校群制度ですが、当初の富士高の男女比率はほぼ旧制度と同じでした。これを不満とする空気はあったものの、段階的な同数化が約束されたことや男子の進学実績が向上したことにより、男女比率の問題は次第に校友から姿を消すことになります。

男女同数までに22年の道のり

男子216名/女子207名と、ほぼ同数が実現したのは昭和47（1972）年度（高校27期）からです。1975年発行の校友で実施されたアンケートでは、男子76.5%、女子79.0%と、共学に対する高い満足度が得られました。

男女共学開始から実に22年。ようやく理想の姿が実現したという思いが、多くの人の胸に去来したのではないのでしょうか。

戦争のあとさき— 校友の運命



校友第17号(1938年)より(部分)

戦争前後の校友事情

第五高女の校友に戦争の影が射すのは、昭和13年発行の第17号からです。以降、校友は以下の表のような変遷をたどることになります。

昭和(西暦)	号数	校友の状況
13 (1938)年	第17号	表紙に「国民精神総動員」
14 (1939)年	第18号	
15 (1940)年	第19号	紙質が落ちる
16 (1941)年		休刊
17 (1942)年	第20号	名称が「報國」となる
18 (1943)年	第21号	
19 (1944)年		休刊
20 (1945)年		
21 (1946)年		
22 (1947)年	第22号	「校友」として復刊

戦時下では「報國」と改称

太平洋戦争への突入とともに校友会は報國団となり、校友も報國と名を変えて発行されました。その内容も勤労奉仕日記や農場の作業記録などに変わり、授業が行われなくなったことが読み取れます。また「一学級を一箇小隊、一学年を一箇中隊、全校で二箇大隊とする。」（報國20号）と軍隊になぞらえた修練強化の組織が編成されました。



報國 第20号

そして戦局が悪化した昭和19年、ついに校友は休刊を余儀なくされます。

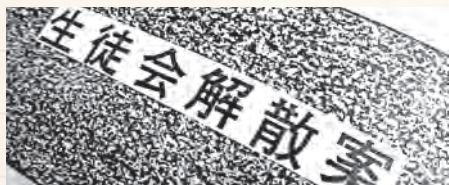
間借り校舎での復刊

やがて戦争末期の空襲によって校舎が全焼し、第五高女は校舎なき3年間を送ることになります。しかし困難な状況下にあっても、昭和22年、粗悪な紙にガリ版刷りで、校友は復刊されました。その翌年からは体裁も新たに印刷物として発行され、名実ともに復興への道を歩みはじめます。



校友 第22号

可決か否決か—— 生徒会解散案



校友第50号(1976年)の見出し

昭和51(1976)年1月8日・始業式の日

寒風吹きすさぶ校庭で上半身裸になり、ふるえながら臨時生徒総会開催を訴え続けた生徒会役員の男子生徒がいました。「君たちも寒いだろうが僕も寒いのだ。がまんしてくれ」。

以下のような理由で生徒会解散案を提出するというのが彼の主張でした。

●現在の生徒会は自治活動の意識が全くない状態で、ごく一部の生徒に依存して運営されている。

●現状のままの存続は無力感を育てるだけでなく学校生活を害し、民主制のあり方を歪めるものである。

●校内の悪根を断ち切って新たな学生生活の道を開き、何らかの組織の必要性が認識されたら、その建設を将来の富士高生に委ねたい（それは必ずしも生徒会でなくてもよい）。

生徒会活性化は発足以来の課題

「どうすれば生徒会を活発にできるか」とは、富士高生徒会が発足して以来、校友で最も多く取り上げられたテーマのひとつでした。学園紛争の時代には生徒総会で制服や許可制について活発に論議されたこともありましたが、この頃は再び沈滞期に入っていました。

臨時生徒総会で解散案否決

同月28日、生徒会解散案を議案とする臨時生徒総会が開かれました。2時間半にわたる激論の末、出席者992名中賛成144名をもって解散案は否決され、生徒会の存続が決まりました。「否決されてよかったで済まらずに、なぜ解散案が出されたのかを考えてほしい」とは生徒会長の言葉です。

解散案否決が残したもの

解散案をめぐる一連の顛末は、生徒会活性化へのカンフル剤となったのでしょうか。残念ながら、その後の生徒会運営に目立った変化はありませんでした。しかし生徒の心には確実に何かを残しました。

「ひとりの人間があればほど真剣になれるということを忘れてはいけないと思う」（校友50号）

そして生徒会の役割も、自治活動の場から文化祭や部活の執行機関へと、微妙に変化していきます。

富士高をゆさぶった 校友問題



校友第43号(1968年)より

校友配布中止問題の発端

校友43号の巻頭言では、前年の羽田闘争での機動隊突入の写真と共に「権力の暴力」について述べられています。前年までとはまったく様相の異なるこの記事が「富士高をゆさぶった校友問題」（富士新報117号）に発展しました。下記はその経緯です。

新1年生に校友が配布されなかった

①校友43号の原稿を顧問教諭に提出した際、「巻頭言」と「オポチュニスト」に問題ありと指摘されたが、生徒側で対応しないまま印刷した。

②刷り上がった校友を見て当時の校長が新入生への配布を中止した。

③5月の生徒総会で、校友43号が新1年生に配布されていない事実について学校側に説明を求めた。

④5月末、明確な回答のないまま学校

から1年生に配布されるに至った。

3年間の問題提起と校友の休刊

学校側が折れた形で問題はうやむやになったものの、これをきっかけに印刷物やビラの許可制などをめぐって学校と生徒会が対立を深めていきます。43号/44号/45号の校友誌上では、社会との関わりや教育のありかたなど、根源的な問いかけがなされました。一部に過激な表現はあるものの、これらの記事は大規模なアンケートの公平かつ的確な分析結果に基づいており、現在でも読むに値する内容です。

しかし昭和46年の校友は発行されず、戦時中を除いて唯一の休刊となりました。

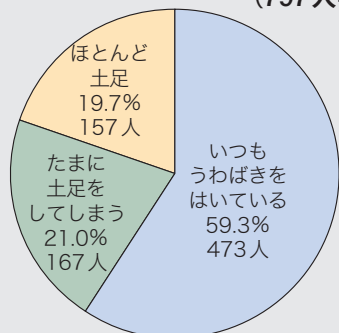
変わったこと・変わらなかったこと

学力テストボイコット事件やバリケード封鎖が起きた3年間は、のちに「富士高が経験した高校紛争」として語られますが、その結末について知らないまま当事者たちは卒業していきました。最も大きな変化は私服での通学が認められたことです。一方、掲示や集会などの許可制は「届け出制」と名を変えて残り、学力テストも継続して実施されました。

一陣の風のように吹き抜けた政治の季節は、その後の「自由な富士高」への扉を開いた3年間であったといえるのではないのでしょうか。

土足問題で守りたかった富士の自由

〈土足〉…うわばきをはいていますか？
(797人中)



校友第59号(1985年)より

「自由上履き制」の問題点

1980年代後半に富士高生であった人に「土足問題」といえば「ああ、あれね」という反応が返ってきます。

当時、昭和の鉄筋校舎はすでに四半世紀を経て老朽化が目立ち、加えて校舎内は上履きと土足が混在して土ぼこりが舞うという様相を呈していました。当時は具体的な指定のない「自由上履き制」を採用しており、上履きと称してその実土足で闊歩する生徒が多くいたためです。この解決策として検討されたのが、学校による「指定上履き制」の導入でした。

土足問題の背景にあった危機感

生徒の側では、指定上履き制を受け入

れることは、単に上履きにとどまらず富士高の自由の根幹に関わる問題としてとらえていました。

「このままだと上履きが決められたりして、自由が少しずつ私たちから遠ざかってしまうかも…」(校友59号)

自主解決への模索

生徒が自主的にけじめをつけることで自由上履き制を守ろうと、生徒会でもキャンペーンを繰り広げます。しかし当座は土足が減るもののすぐに元に戻り、結局は自主解決の道を諦めざるを得ない状況になりました。

ついに指定上履き制へ

平成2(1990)年、新校舎竣工に向けて学校指定の上履き制が導入されることになり、長く続いた土足問題ようやく終止符が打たれました。現在の富士高では、学年別に色違いの上履き着用が徹底されています。

富士の自由は失われたのか

附属中学校での制服義務化に伴い、高校でも平成25(2013)年度から制服が復活し、校内の様子は一変しました。やはり土足問題で懸念された自由の喪失が現実となったのでしょうか。

たかが上履き、されど上履き。これを機に、誰もが「自由な富士」を標榜していた時代は過去のものとなっていきます。

(出典：校友59/60/61号)

サブカル・エンタメ 百花繚乱



最初の漫画投稿(部分)
校友第56号(1982年)より

新しい若者文化が校友に

1970年代末から、校友には漫画やイラストなどのビジュアル的要素が加わり、映画論、漫画論も誌上を賑わせます。世の中の風潮というだけでなく、学校群制度も10年を経て、富士の生活を前向きに楽しもうという気運が高まった結果でしょうか。体育祭や文化祭がかつてないほどの盛り上がりを見せたのも同じ世代からでした。

3年生主導のエンターテインメント

「富士高祭が電波に乗った日」(校友54号)は、「文化祭に燃えに燃えた人たち」として当時の富士高生がラジオ番組に出演したときの様子を誌上で再現したものです。通常は受験勉強で忙しいはずの3

(出典：校友54/56/68/69号)

年生が「文化祭準備に100日をかけた」と発言しています。演劇、映画、バンド、アニメなど、そのどれもがハイレベルであったと評価されています。

進学実績もピークの世代

このラジオ番組では、富士高の進学校としての側面も紹介されました。

「東大合格者40名・全国第15位…早稲田135名・全国第2位…」

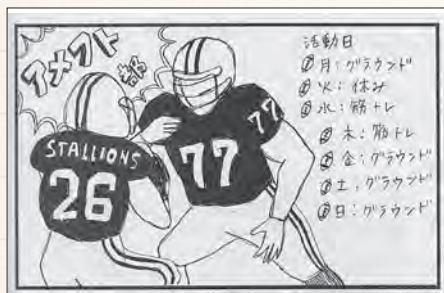
文武両道ならぬ「文遊両道」の学校として、文字通り百花繚乱の様相を呈していたのが、この時代の富士高といえるでしょう。のちにミュージカルも加わり、エンターテインメントの伝統は受け継がれます。

マスゲームに熱狂した15年間

体育祭では、従来の応援合戦がマスゲームに進化して1980年代後半に最盛期を迎えました。選曲や振り付けもすべて生徒が行い、学年全員がひとつになって走り踊るパワーは毎年感動を呼び、最大の人気プログラムとなりました。しかし全員参加が次第に敬遠され、1996年度から行われなくなったのは、ひとつの伝統の終焉であったのでしょうか。

文化祭もかつてのように3年生が浪人覚悟で取り組むという風潮は去り、富士高生自身の意識も「普通の高校生」と変化していきます。

新世代校友は 富士入門ガイド？



部活紹介のページ(部分)
校友第93号より(2019年)

スリムになった新世代校友

平成22(2010)年に富士が中高一貫校になり、校友にも大きな変化が生じました。中学、高校それぞれの校友が必要になったためでしょうか。ページ数が激減し、50ページという薄さになってしまいました。(2012年度以降の校友をここでは「新世代校友」と呼ぶことにします。)

それまで全体の約半分を占めていたクラス紹介のページがなくなり、主な内容は以下になりました。

- ・三行大事(体育祭、富士祭、合唱祭)の紹介
- ・部活と委員会の紹介
- ・学年ページ(修学旅行報告など)

新世代校友の特長

まずイラストや写真が多いこと、つまり文字が少ないことが特長です。

新入生にとっては、富士高の学校生活を知る入門書でもあります。

構成要素の変遷

2019年発行の新世代校友における構成要素を10年前、20年前と比較してみると、その変遷は明らかです。

○：有 ×：無 ()：ページ数

構成要素	1999 73号	2009 83号	2019 93号
総ページ数	106	64	50
特集・企画	○(14)	○(12)	×
富士っ子生態学	○(10)	×	×
行事紹介	○(6)	○(3)	○(12)
クラス紹介			×
生徒会/部活/ 委員会紹介	○(50)	○(48)	○(21)
学年紹介	×	×	○(9)
文芸(投稿)	○(20)	×	×

未来の校友は？

古い世代の中には、最近の校友は読むところが少ないという人もいます。しかし学校の雰囲気伝えるということも校友の大切な役割です。

富士の楽しさをアピールする誌面づくりに挑戦し、100年続くこの校友を次の世代に確実に手渡ししてほしいものです。

25年間続いた 「富士っ子生態学」



校友第66号(1992年)より

作りやすい定番ページ

校友55号(1981年)から80号(2006年)まで25年間続いた「富士っ子生態学」は、タイトルや手法に若干の差はあるものの、主にアンケート調査で富士高生の実態を浮き彫りにしようというページです。

長く続いた理由は、特集のようにテーマを絞らず、間口が広く自由に作れる気楽さの故でしょうか。

ひとくちに「生態」といっても、その

概念は多種多様。時代とともに変化していきます。

学校群時代は西高への対抗意識

初期の頃の生態学は、富士・西の比較など、富士っ子のホンネを探っていました。さらに「今年が最後だ学校群」では進学校としての未来を悲観的に予測しています。また、近隣の店で富士高の評判を取材しているのも、富士っ子の社会的ステータスを意識した表れではないでしょうか。

等身大の富士っ子に

平成に入ってから、休日の過ごし方や好みの芸能人のような、内向きで現実的な生態調査に変化します。いわば等身大の富士っ子をあぶりだしているといえます。たとえば制服着用者は何割くらいか、携帯所持率はどれくらいか、など生活面での生態を扱っているのも、平成の富士っ子の特長です。

機関誌としての最後の砦

言い回しこそ違え、「富士高生とは何者か」という問いかけは、歴代の校友が手がけてきた永遠のテーマでした。これがあからこそ、校友は機関誌としての体裁を保ってきたと言えるでしょう。しかし2007年から富士っ子のページがなくなったことで、校友の位置づけもまた転機を迎えます。

校友発行年/号数(連番)対応表

西暦	和暦	号数	西暦	和暦	号数	西暦	和暦	号数
1924	大正 13 年	創刊号	1955	昭和 30 年	第 30 号	1988	昭和 63 年	第 62 号
1926	大正 15 年	第 2 号	1956	昭和 31 年	第 31 号	1989	平成元年	第 63 号
1927	昭和 2 年	第 3 号	1957	昭和 32 年	第 32 号	1990	平成 2 年	第 64 号
1928	昭和 3 年	第 4 号	1958	昭和 33 年	第 33 号	1991	平成 3 年	第 65 号
1929	昭和 4 年	第 5 号	1959	昭和 34 年	第 34 号	1992	平成 4 年	第 66 号
1929	昭和 4 年	第 6 号	1960	昭和 35 年	第 35 号	1993	平成 5 年	第 67 号
1930	昭和 5 年	第 7 号	1961	昭和 36 年	第 36 号	1994	平成 6 年	第 68 号
1931	昭和 6 年	第 8 号	1962	昭和 37 年	第 37 号	1995	平成 7 年	第 69 号
1932	昭和 7 年	第 9 号	1963	昭和 38 年	第 38 号	1996	平成 8 年	第 70 号
1932	昭和 7 年	第 10 号	1964	昭和 39 年	第 39 号	1997	平成 9 年	第 71 号
1933	昭和 8 年	第 11 号	1965	昭和 40 年	第 40 号	1998	平成 10 年	第 72 号
1934	昭和 9 年	第 12 号	1966	昭和 41 年	第 41 号	1999	平成 11 年	第 73 号
1935	昭和 10 年	第 13 号	1967	昭和 42 年	第 42 号	2000	平成 12 年	第 74 号
1936	昭和 11 年	第 14 号	1968	昭和 43 年	第 43 号	2001	平成 13 年	第 75 号
1936	昭和 11 年	第 15 号	1969	昭和 44 年	第 44 号	2002	平成 14 年	第 76 号
1937	昭和 12 年	第 16 号	1970	昭和 45 年	第 45 号	2003	平成 15 年	第 77 号
1938	昭和 13 年	第 17 号	1971	昭和 46 年	休刊	2004	平成 16 年	第 78 号
1939	昭和 14 年	第 18 号	1972	昭和 47 年	第 46 号	2005	平成 17 年	第 79 号
1940	昭和 15 年	第 19 号	1973	昭和 48 年	第 47 号	2006	平成 18 年	第 80 号
1941	昭和 16 年	休刊	1974	昭和 49 年	第 48 号	2007	平成 19 年	第 81 号
1942	昭和 17 年	報国第 20 号	1975	昭和 50 年	第 49 号	2008	平成 20 年	第 82 号
1943	昭和 18 年	報国第 21 号	1976	昭和 51 年	第 50 号	2009	平成 21 年	第 83 号
1944	昭和 19 年	休刊	1977	昭和 52 年	第 51 号	2010	平成 22 年	第 84 号
1945	昭和 20 年	休刊	1978	昭和 53 年	第 52 号	2011	平成 23 年	第 85 号
1946	昭和 21 年	休刊	1979	昭和 54 年	第 53 号	2012	平成 24 年	第 86 号
1947	昭和 22 年	第 22 号	1980	昭和 55 年	第 54 号	2013	平成 25 年	第 87 号
1948	昭和 23 年	第 23 号	1981	昭和 56 年	第 55 号	2014	平成 26 年	第 88 号
1949	昭和 24 年	第 24 号	1982	昭和 57 年	第 56 号	2015	平成 27 年	第 89 号
1950	昭和 25 年	第 25 号	1983	昭和 58 年	第 57 号	2016	平成 28 年	第 90 号
1951	昭和 26 年	第 26 号	1984	昭和 59 年	第 58 号	2017	平成 29 年	第 91 号
1952	昭和 27 年	第 27 号	1985	昭和 60 年	第 59 号	2018	平成 30 年	第 92 号
1953	昭和 28 年	第 28 号	1986	昭和 61 年	第 60 号	2019	平成 31 年	第 93 号
1954	昭和 29 年	第 29 号	1987	昭和 62 年	第 61 号	2020	令和 2 年	第 94 号

あとがき—
小沿革史として

本来は「読者限定」の校友

富士高の「校友」は生徒会の編集委員会が作成し、在校生および新入生に配布する小冊子です。したがって全会員に送られる会報「若竹」とは異なり、幅広い世代の目に触れることは想定せずに編まれたものです。今回、戸棚から引っ張り出されて歴史の証言者のように扱われ、一番困惑しているのは校友自身かもしれません。従来とは異なる切り口の沿革史としてお読みいただければ幸いです。

校友では触れられていない事柄

本稿では校友の記事を中心としたため、富士高史上の重要な事柄であるにもかかわらず言及できなかったものが多々ありました。いくつかを挙げるとー

- ・清里寮のこと(1963年～)
- ・放火事件と裁判の経緯(1973年～)
- ・君が代・日の丸問題(1990年～)

(これらについては、60/70/80/90年の各周年記念誌に記載があります。)

校友の文芸欄に投稿されたユニークな小説なども紹介できず、心残りです。

名編集長にヒアリング

本稿の作成にあたり、「校友を読む会」

を実施して世代の異なる5人の編集長に話を聞きました。当時の編集秘話を期待していましたが、「ほとんどひとりで作った」「当時のことはすっかり忘れた」など想定外のクールな反応が目立ちました。

とはいえ、それぞれの時代の雰囲気を感じられたことは貴重でした。この場を借りて御礼申し上げます。

号数の連番表記について

実物の校友のナンバリングは、下記のようにまちまちです。

①連番(昭和)：創刊号から第63号。

②連番(平成)：1st から7th

③〇〇年度：連番なし。

本稿では、便宜上、独自に連番を振って記載しました。次ページの発行年/号数対応表をご覧ください。

創立100周年アーカイブプロジェクトについて

100周年記念事業アーカイブ班では、校友をはじめとする若竹会の史料をデジタル化し、卒業生なら誰でも利用できる形にするためのプロジェクトを進めています。

2021年の富士祭や大人の文化祭でも史料の展示を行う予定です。

是非会場に足を運んでください。

(100周年記念事業アーカイブ班 高校23期 反中章子)

いろいろな土地を訪ね いろいろな本を読んでみよう

高校16期・作家
池澤夏樹さん



池澤夏樹（いけざわ・なつき、高校16期＝1964年卒）作家、詩人。45年北海道帯広市生まれ。埼玉大学理工学部物理学科中退。88年『スティル・ライフ』で芥川賞、93年『マシマス・ギリの失脚』で谷崎潤一郎賞、2000年『花を運ぶ妹』で毎日出版文化賞、11年個人編集の世界文学全集で朝日賞、ほか受賞多数。

作家の池澤夏樹さん（高校16期）が今年1月、1964年の卒業以来初めて母校を訪れた。校長、副校長と卒業生有志（落合恵子、福岡恵、綿谷朗子）が案内役を務めた。

――久しぶりの母校は、いかがでした。

「ずいぶん立派になって広くなったなという印象です。廊下が広い。あちこちに生徒がいろいろな使い方をすることが出来るスペースが用意してある。図書委員をしていたので、図書館が興味深かった。当時、奥野丈夫先生が創刊した『ブラリアン』という広報誌がまだあったのに驚きました」

――池澤さんは小説家の父親と詩人の母親の間に生まれています（父親は小説家の福永武彦氏、母親は詩人の原條あき子氏。二人は離婚し、池澤さんは母親が再婚した池澤喬氏の姓を名乗っている）。本とともに育った？

「池澤さんは小説家の父親と詩人の母親の間に生まれています（父親は小説家の福永武彦氏、母親は詩人の原條あき子氏。二人は離婚し、池澤さんは母親が再婚した池澤喬氏の姓を名乗っている）。本とともに育った？」

――企業に就職することは考えなかったのですか。

「就職は考えたことがないんです。一つの組織に入ったり、みんなと協調して大きなものを作り出したりすることができないんです」



「高校時代はみんなと仲が良かった。学園祭の準備も一緒にやったし、溶け込んでいた。でも、大学に入ってからほとんど友達ができませんでした。大学では

「実の父親が作家であることは高校に入るまで知らなかった。一緒に暮らしたのは2歳くらいまで。彼は結核で東京のサナトリウムに行ってしまったので。ただ、家には本がいっぱいありました。文学を大事に扱う雰囲気があり、本は小中高とよく読みました」

「読んでこんなに面白いのだから、書いたらもっと面白いのではないかと思いました。ただ、小説は書くとしなかった。一つは父親の存在。うかつに書いて『息子はだめだよ』と言われたらアウトです。心理の深いところで、小説を書くことを禁じていた。詩を書いて、翻訳をして、評論を書いていた。小説を書き始めたのは父が亡くなった後の30代後半になってからです」

「一方で、僕は理系の道を進みました。高校という年頃に方針なんて決まるものじゃない。まだ開いていないカード

勉強ばかりしてましたし、翻訳の仕事もしていた。『かもめのジョナサン』って最初に日本語にしたのは僕なんです。五木寛之氏の単行本が出る前に雑誌に翻訳を掲載しました」

――友達ができる暇もなかったのかもしれないね。

「なんとなく気が合って、気がついたらいつも一緒にいるというのが友達です。そういう友達が高校時代はいました。小笠原憲之とはいつもつるんでいた。水上善男は学校を出てからも40代まで付き合っていました」

「でも、僕は付き合いがなかなか継続しない。基本的に不人情なんです。小説を書いていながら、微妙な人間関係を描けない。『スティル・ライフ』だって、突き放した感じでしょう」

――『スティル・ライフ』は最初の小説ですか。

「その前に『夏の朝の成層圏』という最初の長編を書いてます。1本書いたからいいやと思っていたら、編集者が『もういつぺんちゃんとやろうよ』と言うんです。今度はあまり長くない『スティル・ライフ』を書いたら中央公論新人賞に。で、自動的に芥川賞の候補になった。そして、芥川賞に『当たって』しました。すぐに東京会館で記者会見をしたのですが、文芸担当の記者たちが『池澤さん、な

池澤作品を読み込んでいる高校38期の福岡恵、綿谷朗子さんも加わり、池澤夏樹さんにインタビュー

んかうれしそうじゃないですね」という。ここは素直に喜ぶべき時なんだと察したのですが、芥川賞は1カ月以内に受賞後の第一作を書かなければならないので、それをどうしようかで頭がいっぱいでした。『アップリンク』という短編を書き、なんとかやれそうと思いました」

——芥川賞受賞でお母様は喜びましたか。

「母は子供を連れて再婚したわけでしょう。新しい僕に僕を育ててもらったわけです。そこに芥川賞が降ってきたから、育ての親への恩返しができました」

——実の父親とは連絡はとっていたのですか。

「年に一、二度くらい会っていました。父が亡くなってからは、蔵書、ノート、メモ、原稿などの文学的遺産を集め、『福永武彦戦後日記』『福永武彦新生日記』の2冊にまとめました。それが実の父親に対する恩返しです」

——池澤さんは世界各地に行かれていますね。

「海外で最初に行ったのは太平洋の島です。どこかに行つて、その土地を見て、言葉を聞いて、食べて、というのが好きで仕方がない。それまで飛行機に乗ったことさえなかったのですが、27歳になつてお金もたまり、ミクロネシアに行ったら、こんなに伸び伸びして楽しいところはないと思いました。それから、海外に行くのが病みつきになり

ました。旅じゃ見られないものもいっぱいあるので、住んでみたいと思い、ギリシャに3年住みました。貧しい国のほうが本当の人の姿が見られると思い、ギリシャから、エジプトやトルコにばかり行っていました」



卒業以来初めて母校を訪れた池澤さん(北通門前で)

「芥川賞をもらって作家になってからは取材で日本中を回りました。西表島や北海道の湿原、南島島などに行つて雑誌に紀行文を書いていました。沖縄にはまり10年暮らした後、フランス・パリ郊外のフォンテーヌブローに5年住みました。今いる場所から一度出てみなさいと、若い方々にはアドバイスしたい」

——池澤夏樹Ⅱ個人編集世界文学全集を手掛けたのも、世界を見なさい、ということですか。

「河出書房新社の昔なじみの編集者が、フランスに住んでいる頃に、やつてきて、『世界文学全集をやろうよ』と言う

んです。最初は突き放しました。全集は最初にリストを発表するので、そのリストで、皆、文庫を買ってしまいます

から。でも、何かやり方はないかと考えました。30年間ずっと書評を書いてきたので戦後の世界文学のめばしいものはだいたい目を通している。第二次大戦後から9・11くらいまでの世界の動きを文学で表現できないかと思つて、改めて話したら、やろうということになりました」

「リストアップして30巻にしたら、かつての文学全集とは違うものができました。植民地から独立した小さな国の作家や女性の作家が多くなった」

——池澤夏樹Ⅱ個人編集日本文学全集も出している。

「世界文学全集の3分の2くらいが刊行された時に河出書房の編集者から日本文学全集もやろうと言われました。『日本文学は知らないから無理だ』と突っぱねました。世界文学全集の最終刊が2011年の3月10日に出て、翌日が震災。それから1年間、ひたすら東北に通い、『自然災害ばかりだが、異民族支配はない、この国で生きてきた日本人』に改めて関心が湧きました。たまたま、河出の社長から『あれ、考えない』と言われ、本当に勉強すればできるかもしれないと思ひ直し、やることにしました。今度は古代から現代まで縦方向で作品をリストアップ。古文は、訳すのに

ふさわしい作家を選びました」

——9・11後には毎日メルマガジン(メルマガ)で意見を発信していました(『新世紀へようこそ』参照)。

「アメリカはなんでそこまで憎まれていたかがわかっていない。思うところが多いので無料のメルマガで意見を表明しました。読者からの返信も多かったです」

——憲法を見直そうという動きに対して、集英社文庫『憲法なんて知らないよ』では、憲法の正しい翻訳について書いています。「権利」は「権理」と訳すべきだったなど、なるほどと思う訳が多いですね。

「それが文学者の仕事なんです。権利はこの国でも『正しい』という意味です。この国で使われている日本語のチェックは文学者の仕事です」

——後輩に伝えたいことはありますか。

「紙の本っていいものです。本は人に向かって『読んで』と言っているのだから、その声を聴いて、1冊でも手に取ってほしい。ネットと違って、紙の分だけ重さがあつて消えなくて電源が切れても読める。本を知っておくと、長い人生においていいことがありますよ」

(2020年1月20日、えん酌で。文・相川浩之、写真・落合恵子)

高校時代は映画漬け 映像のように小説描く

高校40期・小説家／脚本家
和田竜さん



和田竜(わだ・りょう、高校40期=1988年卒) 69年大阪府生まれ。広島県育ち。早稲田大学卒。2003年オリジナル脚本『忍ぶの城』で第29回城戸賞を受賞。07年『忍ぶの城』を小説化、『のぼうの城』として出版。『のぼうの城』は12年に映画化。14年『村上海賊の娘』で吉川英治文学新人賞と本屋大賞受賞。

「2014年本屋大賞」に、高校40期の脚本家・小説家、和田竜さんが著した『村上海賊の娘』が選ばれた。和田さんは、『村上海賊の娘』で、大衆小説分野の有望な若手作家に与えられる「第35回吉川英治文学新人賞」も受賞した。文学賞のダブル受賞は快挙だ。

——和田さんは大阪でお生まれになって、生後3カ月から中学2年生まで広島市で暮らされていました。瀬戸内海の島々には親しみがあつたのではないですか。

「父は、よく僕ら兄弟を名所旧跡に連れていってくれ、因島にも行きました。ただ、全然覚えていないんです(笑)。小説を書くために5年前に瀬戸内海に行つて、こんなにいい景色なんだと再認識しました。瀬戸内海に村上水軍という海賊がいたという知識はあつて、『かつこいいな』とは、子どもの頃から、ずっと思っていました」

黒澤映画に凝りました。原作を書いた山本周五郎を読んで、司馬遼太郎を海音寺潮五郎がほめていたという逸話を知つて、海音寺潮五郎を読みました。この3人が僕の敬愛する作家です」

——『村上海賊の娘』を読んで、印象的だったのは、例えば、主人公の景姫が敵に斬りつける場面の描写です。映像のように目に浮かぶ。

「実は脚本を書く時も、イメージはあるんですよ。脚本には演出部分のことは書かないという作法があります。でも脚本を書く以上はこういうシーンにしてほしいというのは僕の頭の中にはあります。小説のときにはそれも、全開にして書いているということです」

——まさに映画を作るような感覚で小説を書かれているんですね。

「文字で演出しています。こういうタイミングで、こういうような絵が入つて、ぱつとカットが切り替わつて、こういう動きをしましたというのを文章にするとどんな感じかなと考えるんです。スピード感も読者には理解してもらいたいのので、アクションシーンなどは短いセンテンスで、畳み掛けるような感じで書きます」

——小説を書く時も映画の脚本を意識されている？

——歴史を好きになつたのはいつ頃からですか。

「富士高校の日本史の先生には申し訳ないのですが、大学に入ってからです。高校で教わる教科書の歴史は、人間の感情が排されて書かれているのですが、人間の感情が伴わないと歴史ってよく分からないのです」

——歴史に興味をもつきっかけは。

「大学の夏休みに『竜馬がゆく』(司馬遼太郎)を読んだのがきっかけです。僕の『竜』という名前は竜馬から取ったんだと小さい頃から言われていたので、読んでみると思つて読んだのが始まりです。これが面白くて土佐(高知)に行つたり、京都に行つたりしました。史跡巡りも始めて、どんどん歴史小説を読んでいきました。読んではどこかへ行き、という感じでした」

「最初は幕末を描いた司馬遼太郎の作品を読み、それから

「僕は映画が好きなので映画の脚本を意識しますね。2時間くらいのなかで収まる物語というのが一つの形としてあります。村上海賊はそのまま映画にしたら5時間くらいになつてしまふと思いますが(笑)」

——『村上海賊の娘』の参考文献はたくさんありますが、歴史小説を書くのは大変そうですね。どれくらいかかったのですか。

「取材に1年かけて、シナリオに起こすのに1年かけました。連載が2年ぐらいいで、半年くらいかけて直しました。合わせて4年半ですね」

——文献を読むだけでも大変ですね。古文は得意だったんですか。

「普通でした(笑)。人並みです。古文書もがんばれば読めるものです」

——記者の経験もあるんですね。

「繊維ニュースというタブロイド判の新聞の記者をしていました。記者の経験は脚本や小説を書くのに役立ちました。いろいろなところに取材することが簡単にできるようになりました。フットワークが軽くなった」

「司馬遼太郎の文章って、新聞記者の文章だなんて思いました。『司馬史観』というのがあつて、自分の主張がある

のですが、それは私が言っているのではなくて、歴史上のこの人が言っていますと引用する。それってまさに新聞のまとめ記事のようですよね」

——和田さんの小説は、とにかく面白い。

「小説はまず面白くなければいけないと思って書いています。では何を面白いと読者や観客が言ってくれるかという、そのために必要なフアクターっていっぱいあるんですね。そのなかの一つがテーマであり、あとは、矛盾のない破綻のない物語だとか、登場人物の魅力であるとか、史実をしつかり調べていますとか、そういうことだと思っ
うんです。ただ、それらはあくまで材料に過ぎなくて、テーマでさえ材料に過ぎない。書いていて、音楽的な快感があるようなものになりたいと思います」

——和田さんが時代小説を書かれるのは、なぜですか。

「戦国ものは読者がいる限り書いていこうと思います。関心もあるし、その時代が僕は陽気な時代だったと思うので、書きたくります。戦国時代は、勝手気ままに上司に文句を言ったりする人たちがばかりで、江戸時代の武士とは毛色が違うんです。そういう陽気さ、明るさが、僕は気に入っていて、書いています。あとは僕はアクションものが好きなんです。歴史のなかで戦国というと、日本人にはなじみ

きていたのか、ということ調べるのも、大変重要です」

「例えば強敵が現れたとします。現代であれば、『やばい』とか『恐ろしい』とか思うのですが、当時はそれを討ち取ったら大変な出世ができるので、『よっしゃ』っていう感じなんです。その感覚って、我々と180度違うから、それをきちんと書きたいと思います。スポーツ感覚もあって、敵がフェアプレー、ファインプレーをすると、あっぱれ、みたいな声が出てくる」

——今回、『村上海賊の娘』は100万部以上売れて、本屋大賞と吉川英治文学新人賞を取られましたが、それぞれどんなお気持ちだったのですか。

「本屋大賞は読者目線で選んでいるというか、読者の延長線上にあるという感じがする賞なので、いい賞だなと思いました」

「老舗の文学賞は、取ってみて分かったのですが、格別な感じの出来事でした。選考委員の先生にお会いする機会あったのですが、小さいころから知っている名だたる作家がいて、僕の小説を読んでくれていて、旧知の人間のように話してくださったので感動しました」

——高校時代はどんなことをしていたんですか。

「早く帰ってビデオ借りて映画ばかり観ていました」

があるし、戦があつて当然だし、調べてみると、アクション映画に出てくるようなド派手な人がいるんです。そういうのは便利と言えば、便利ですね」

——戦国時代の日本人は、日本人にもこんなところがあったのか、と感じさせてくれますね、

「日本ってこんな島国なのに、剽悍(ひょうかん)な人間たちがすごくいたんだなと思います。それが日本人の本来の姿だったのかなとも感じます。その感じは僕にとって新鮮でした」

「ただ、400年前の感覚と、現代の感覚はまるっきり違うということは、物語のなかで大事にしたい。死生観が全然違います。書かれている史実も大事なんですけれど、その時代の人がどういう空気の中で、どういう感覚で生

——大学は早稲田の政治経済学部。

「テレビ局に行きたかったのですが、昔からマスコミに強いと言われた早稲田の政経を目指し、一浪してがんばって通りました」

——テレビ番組の制作会社に入りましたが、ちょっと、思った職場とは違ったのですか。

「そうですね。ただ、体動かせ、みたいのが合わなかったんですね。4年半もかけて1冊書いていたらバカと言われそうなどころでしたから」

——和田さんはいろいろな道を歩まれています、これがやりたいということがあったから、いまがあるのでしょうか。

「新聞記者をやり始めたのも、脚本をコンクールに送るため、食うためでした。給料をもらうんだったら脚本を書くのに役立つようにと、書く仕事を選びました。ずっと映画に関わっていきたいと思っていました。それがひょんなことから小説を書くようになった。ずっとつながっているんですけど、形は徐々に変わってきた気がします。でも『思い』はずっとありました」

(2014年8月27日、新潮社で。文・相川浩之、写真・落合恵子)



私生活を大切にしながら 面白いものを描きたい

高校42期・漫画家
よしながふみさん



よしながふみ（高校42期＝1990年卒）71年東京生まれ。慶應義塾大学法学部卒。代表作の『西洋骨董洋菓子店』は2002年、第26回講談社漫画賞少女部門受賞。現在、白泉社「月刊メロディ」で『大奥』を、講談社『モーニング』で『きのう何食べた？』を連載中。『フラワー・オブ・ライフ』は都立富士高校が舞台。

料理漫画『きのう何食べた？』や、女性将軍に眉目秀麗な男性たちがはべるSF時代劇漫画『大奥』などで知られる漫画家のよしながふみさん（高校42期）は、自分の時間や家族を大切にしている。本名や顔写真を公表しないのは、「ひどい格好で近所を歩きたいから」。登場人物たちのリアリティのある性格描写がよしなが漫画の魅力。そんな表現ができるのは、よしながさんが著名人になっても普通の生活が続いているからかもしれない。

漫画が大好きとか。

「小学校に上がってからずっと読んでいます。少女漫画を中心にいろいろ読んできましたが高学年になると『少年ジャンプ』掲載のコミックスも友人に借りて読むようになりました。『キャプテン翼』がきっかけで女の子も少年漫画を読むようになっており、読まないと話についていけない

くなります」
「少女漫画は付き合いのためでなく、自分ひとりの楽しみで読んでいました。背伸びして、私が生まれたところに人気を博した漫画家さんの作品も読みました。昭和24年組と言われるそれまでの少女漫画の作風を変えた萩尾望都さん、大島弓子さん、山岸涼子さんといった方々の作品です。親戚のお姉さんが、その人の子供の頃からの漫画雑誌を貸してくれて、手塚治虫の作品なども読んでいました」

漫画家を志したきっかけは？

「一生続けられる仕事として弁護士を目指しましたが、大学3年の時に同人誌を描き始めてしまいました。友達の家で道具を預けて、そこで描いていました。司法試験を受けるからと親をだまして大学院にも行きました。奨学金をもらえたので親に迷惑はかけないと思って」

「出版社に就職した同人誌の仲間からプロの漫画家にならないかと誘われ、『なります』と二つ返事で引き受けました。親には『漫画家を目指すのだったら心配でしょうが、もう漫画家になったのだから安心して』と話しました」

司法試験に未練はなかったのですか。

「もともと、知り合いのおじさまの弁護士さんが暇そうで、こんなに暇なら趣味で漫画を描きながらでもできそうだなと思って目指しただけのいい加減な弁護士志望でしたので、何の未練もなかったです」

高校時代は漫画をよく描いていたのですか。

「漫画の話がしたくて漫研に入りました。描き方を教えて



名前がプロデビューした。
「同人誌をやっているときに、この名前を付けました。それまでは『丸焼豚子』だったのですが、友達に、「自虐的なペンネームは、訪ねてきてくれた読者が口にしづらいから変えて』『女優のように美しい名前にしな!!』と言われて、

沢々よしながふみに変えました。『もつと今どきの女優にしないの!』とは言われましたが」
「漫画家として、あまりスタンダードなやり方ではないのですが、単行本がでるたびに、出版社を回り、次はこうい

う話を描きたいとプレゼンをしていました。向田邦子や山田太一のドラマが好きなので、出版社に『親子のジャンルでテレビドラマのような漫画を描きたい』とプレゼンし、『こどもの体温』という短編を描かせてもらいました。のちに同じ出版社から『西洋骨董洋菓子店』で、4巻の単行本を出しました。テレビドラマ化もされ、私にとって転機になりました」

——大作『大奥』を描き始めたきっかけは？

「単行本は年内に19巻が出て完結します。『大奥』のストーリーは、あるときラストまで思いついてしまったのです。ちよんじイギリスの医学者、ジェンナーが種痘法を開発したころなので、あの方法で、男子のみを襲う謎の疫病を治せばいいんだと思いました。しかも鎖国をしている時期なので、鎖国と疫病を絡めることもできた」

「出版社の担当さんに3時間くらいかけてストーリーを話し、自分ではなくベテランの漫画家さんに描いてもらったらか、と提案したんです。描き始めたら連載が長くなり、下調べしなければならぬことも多くて大変そうでしたから、ブレインなども抱えているベテランの漫画家さんならできるのではないかと思ったのですが、担当編集者さんから『自分で描きましょうよ』と言われました。『ブレ

ンを抱えられるくらい偉くなってから描きたい』と担当さんに言ったら、『将来偉くなると思ってるのか』と聞かれるので、『思っていない』と答えると、『それなら、体力のある若いうちにやったほうがいい』と言われ、納得しました」

——いろいろ問題提起している作品だと思いました。

「こういうことを伝えたいとか、問題提起したいと考えているわけではないんです。漫画家なので面白いものを書きたい、という一点に尽きます。大筋のストーリーは描き始めるときから固まっているのですが、登場人物の性格や人間関係は、描いて始めて見えてきます」

——『きのう何食べた？』は、寛史朗と矢吹賢二というゲイのカップルを軸にいろいろな人間ドラマが展開するのだけれど、最後は料理を作り、二人で味わうという場面で終わります。このパターン、なぜかほっとしますね。

「朝ドラやホームドラマは必ずご飯を食べるシーンが入ります。何も解決するわけではないのだけれど、食卓を囲んで落ち着くというパターンが多いです」

「ご飯ものとして企画した漫画なので、人間ドラマの部分についてはゆるく考えて始めました。私のデビュー作『月とサンダル』もボーイズラブがテーマで、このジャンルは好きです。ホームドラマも好きで、この作品はボーイズラ

ブであり、ホームドラマでもあります」

「ボーイズラブを描いていたときも必ず親の話とかが出てきました。この人たちの人生はそれぞれの家族にも影響してくる。そこが面白いんです。史朗と賢二の二人だけの時は男女のカップルと何も変わらないのですが、親にどう言うのか、世間にどう言うのかというところが全然違う。男性カップルだと介護施設に一緒に入居できないので、お金がかかるとか、男性のカップルだと片方が亡くなっても一銭も相続できないなど、法律上の扱いも男女の夫婦とは全然違いますから」

——漫画のレシピに従って実際に何品かを作ってみると、

手際よくできるので感心しています。

「料理本などでも一品ずつしか作り方を教えていないものがほとんどなので、主菜も副菜も同時に作る場面を描いています。冷蔵庫にあるもので何を作ろうか、自分が悩んできたものを描いています。『モーニング』に連載している漫画なので、一番多い40代の男性読者の奥様が読んで作っているようです。今は空前の自炊ブームだそうで、自炊をなさる若い方にも重宝してもらっているようです」

「料理漫画を確立したのは『美味しんぼ』だと思いますが、『きのう、何食べた？』は家庭料理に特化しています。スーパード手に入る食材だけを使い、昼食を除いて月3万円の予算の料理を紹介しています」

——最後に富士の後輩に伝えたいことを。

「決して無理をしないで、と言いたいです。漫画家を始めたときから寝られないようなペースで仕事はしないようにしよう決めていました。私生活を大事にしてこそ、仕事でも良い結果が出せると思っています」

『フラワー・オブ・ライフ』は富士高校に取材に行つて描きました。読んでください」

(2020年1月31日、カフェ・ド・ヴァリエテで。文・相川浩之)



『大奥』©よしながふみ／白泉社

「演劇は自分をリセットする場」永井 「美術の楽しみ方を提案したい」高橋

永井愛さん（劇作家）×高橋明也さん（美術史家）

劇作家・演出家の永井愛さん（高校22期）と美術史家で三菱一号館美術館館長の高橋明也さん（同24期）は、高校時代、演劇部の先輩と後輩。永井さんは、時代の空気や生活を読み解く意欲的な作品を上演。高橋さんは、知的な楽しみに溢れる企画展示を続けてきた。

——永井さんが演劇の道に入ったきっかけは？

永井 「両親は離婚し、私は父に引き取られました。父は画家の永井潔。祖母もいて、よく話をする一家でした。私は学校で起きた出来事を、芝居のように面白おかしく語りました。それが人に対する観察力、洞察力や表現力を養う稽古になっていたのかもしれませんが。父は挿絵も描いていて、そこに描かれたユーモアや批評性を見ると、父のものの見方、捉え方が私の作品にも影響していると思います」

「私は幼稚園の頃から人前で演じることに楽しさを感じていましたが、小学生の時は太っていて友達に『目無し豚』

などとかかわられていたので、役者になりたいという思いは心に秘めていました。高校でも最初、テニス部に入ったのですが、仲の良かった友人の川島明女（めめ）が演劇部に入り、ついていきました。3年の時、高橋くんが入部。『かわいい男の子が入ってきた』と評判になりました」

——何で高橋さんは演劇部に入ったのですか？

高橋 「映画や演劇が好きでした。映画は、『ゴッダール、トリュフォー』や『パゾリーニ』、吉田喜重、篠田正浩、大島渚の作品など色々観ていました」

永井 「ちょうどアメリカン・ニューシネマが出てきた頃で、『俺たちに明日はない』『卒業』などを観ていましたよね。新聞の映画欄で作品を見つけて名画座をはしごしていました。演劇部で取り組んだのは、『人形の家』や『ガラスの動物園』などのいわゆる名作でしたが」

高橋 「でも、土方巽の暗黒舞踏や、寺山修司の『天井桟敷』、

唐十郎の『状況劇場』などには、魅了されました」

——部活以外の学校生活はいかがでした。

永井 「私の卒業した中学校は、問題を起こす子の多い中学校。父が『そういう学校こそ行つたほうがいい』と言うので、行ってみたら、すごく楽しかった。その校風にすっかりな

じみ、富士高校にはあまりなじみませんでした。いまは富士の卒業生がたくさん芝居を観に来てくれてうれしいんですが、当時は多くの人とは付き合えなかった」

高橋 「僕は富士高校に入った時から斜に構えていましたが、なんだかんだ言ってもそれなりに楽しんでいたのでしょう。

入った時は8番だったそうですが、3年の時は後ろから数えた方が早いくらいに。大学入れないぞと教師に言われ、芸術系に行こうと突然企て、半年くらい近所にアトリエを構えていた大庭勝郎さんという春陽会の方についてレッスンを勉強したんです。明け方まで描いてフラフラになって学校へ出かけたことも。それで何とか東京芸大に入れました」

——なぜ、プロデューサー的な仕事に進んだのですか？

高橋 「小学生時代の体験が大きかった。小学校6年生の夏に、早稲田大学のフランス語教師をしていた父が1年間の交換留学でパリ大学に行くことになり、



母と私も一緒にいきました。横浜からマルセイユまでの片道40日、往復80日の船旅。ベトナム戦争で北爆が始まった頃で、メコン川を遡りサイゴンに立ち寄ると、たくさんの難民が乗船してきました。航海中にインド・パキスタン戦争が始まり、船客のインド人、パキスタン人たちが反目していたのに、各寄港地でエジプトでツタンカーメンの秘宝や、アスワンハイダムのラムセス2世の大神殿などに触れているうちに、皆の心が打ち解けていく。素晴らしい文化を紹介する仕事をしてみたいと思いました。当時、パリには日本人学校がなく、一人で寺院や美術館を見て回りました。週1回、ルーヴル美術館が無料で入れ、1日中、ルーヴルで過ごしていました」

——永井さんは大石静さんとの出会いが大きかった。

永井「『春秋団』に入り、大石静と出会いました。『春秋団』の解散後も2人で知人の劇団に出してもらっていましたが、30歳を迎える直前に自分たちで台本を書いて演じようということになり、81年大石の書いた『兎たちのバラード』で活動拠点となる『三兎社』を旗揚げしました。翌年に上演したのが私の第一作『アフリカの叔父さん』です」

「10年一緒にやったのですが、静がテレビドラマで売れっ子になり、40歳を迎える年に卒業。私一人になって3年目



永井愛（ながい・あい、高校22期＝1970年卒）、劇作家・演出家。桐朋学園大学短期大学部演劇専攻科卒。81年、大石静と「三兎社」を結成。91年より単独で主宰。「言葉」「習慣」「ジェンダー」「家族」「町」など、身近や意識下に潜む問題をすくい上げ、現実の生活に直結したライブ感覚あふれる劇作を続けている。

から86年の春までパリのオルセー美術館の開館準備室で働きました。西洋美術館にいた26年間で思い出すのは、まず、『ジャポニスム展』（88年）。オルセー美術館と共同企画した点で画期的でした。『ドラクロワとフランス・ロマン主義展』（89年）は一般に知られていないような作品をフランスの地方美術館の収蔵庫から引っ張り出してきて、フランスでも高い評価を得ました。そして、『バーンズ・コレクション展』（94年）は107万人という凄まじい数の入場者があり社会現象になりました」

「日本の美術館は、企画全体のマネジメントができる人が少ない。マネジメントは長い間、新聞社や放送局の文化事業部が担ってきた。私が三菱一号館美術館の仕事を引き受けたのは新聞社主導型でない、リスクはあるが、より主体的な企画をやりたいと思ったからです。一号館は皇居と東



高橋明也（たかはし・あきや、高校24期＝1972年卒）美術史家。53年東京生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。国立西洋美術館主任研究官・学芸課長を経て、2006年、東京丸の内の三菱一号館美術館初代館長に就任。著書に『美術館の舞台裏』、共著に『初老耽美派 よろめき美術鑑賞術』。

に、高度成長期の家庭を描いた『時の物置』という作品で手応えを感じました。これが、時代の転換期を生活の場で描く『戦後生活史劇3部作』の1作目です。2作目『パパのデモクラシー』は、終戦の翌年、軍国主義から民主主義への転換を人々がどのように受けとめたかを軍国主義の旗振り役となった神社を舞台に描きました。その時、人に勧められて芸術祭に参加したのですが、忘れた頃に文化庁から電話があり『芸術祭の大賞に選ばれました』と言われてびっくり。旅公演の誘いも来て、地方を回ることにになりました。東京公演の赤字はほかの仕事で埋め合わせていたのですが、受賞が数年続いたこともあり、50歳を過ぎてようやく芝居で食べていけるようになりました」

——高橋さんは国立西洋美術館の学芸員になります。

高橋「文部省（現文部科学省）の在外研究員として84年の秋

京駅に挟まれた場所に独立した建物として作られていて、立地がとてもユニーク。街をあるいていて、いつでもふらりと入れるような、身近な美術館にできると思いました」

——学校や若い人におっしゃりたいことはありますか。

永井「日本でも演劇教育を広めたい。『他者になる』とはどういうことかを子どもに体験させたいですね。演劇の時間がカリキュラムに組み込まれたら、自分以外の立場に身を置いてみるという経験が増えるんじゃないでしょうか」

高橋「美術も同じです。学校の美術の授業には、『観る』教育、鑑賞教育が一切ないので、鑑賞のし方を教えてほしい」

永井「いい演劇は、固定観念に揺さぶりをかけてくれるものだと思います。フィクションの世界でなら、現実社会での立場や利害を離れて、別の角度から物事を見ることができる。気づかなかった自分に気づいたり、違う価値観に身をゆだねてみたり、そんなふうに自分を揺り動かしてリセットする場として、もつと演劇を活用してほしいです」

高橋「美術史家3人で初老耽美派というものを最近立ち上げました。正解がないこと、役に立たないものが美術。それをばーっと眺めましょと積極的に提案していきます」

（2019年7月14日、「永井潔アトリエ館」で。文・相川浩之、写真・落合恵子、落合菜月）

「日本人のルーツを作品に」清水 「独立し自分の世界を発信」村田

清水慶太さん（プロダクトデザイナー）×村田晴信さん（ファッションデザイナー）

椅子やテーブルなどのプロダクトデザイン分野で活躍する清水慶太さん（高校45期）。2018年に自身のブランド「HARUNOBUMURATA」を立ち上げたファッションデザイナーの村田晴信さん（高校59期）。二人は高校時代からその才能を開花、文化祭などで大活躍した。

——清水さんは高校時代から絵の才能を発揮していた。

清水「文化祭のポスターとかチアガールの衣装とかを作る場面で、よく声がかかりました」

——なぜ絵がうまいという評価が固まったのですか。

清水「友達とか先生の似顔絵を描いて遊んでいたんです。先生の似顔絵を描くとふだんしゃべらない友人とも会話が弾みます。結局、教師全員の似顔絵を描き、『校友』に載せました」

——高校では美術を選択？

清水「美術は好きで毎日絵を描いていたので、選びません

でした。音楽は部活でオーケストラをやっていましたので、それでいいかと。で、全くやったことのない書道を選びました。書道は先生の書いた通りにすぐ書けるようになり、余った時間で相撲の文字とかを書いて遊んでいました」

——将来の道は決まっていた？

清水「親もプロダクトデザイナーをしていて、影響を受けました。職場にたまに遊びに行つて、こういう世界はいいなあと思いました。父親には、『やるんだったらグラフィックもプロダクトも内包する建築がいいよ』と言われたのですが、数学が不得意で。実は似顔絵を描かれたことをひどくお怒りになった数学の先生が僕を職員室に呼び出したんです。けんかみたいになつてしまつて、もう数学はやらないと、3年の時は数学をとりませんでした。結果的に、それでよかったのですが（笑）」

「一浪して東京芸術大学に入り大学院まで行つたのですが、

企業勤めはせず、ずっとフリーでやっています」

——村田さんのファッションとの出会いは？

村田「富士高校も、中学校も、制服がなく、おのずと何を着ていこうか考えるわけです。服を変えることでかなり気分が変わることを実感し、自然にファッションに対する関心が高まりました。8歳上の姉の影響も受けました」

「部活はサッカー部だったのですが、ファッションが好きになつという立ち位置でした。周りにもファッションが好きをやつがいて、3年の文化祭の時にクラスを超えて有志が集まつてファッションショーをやりました。剣道場のところを暗幕で覆つて、爆音を流しました。DJをやつてくれた久保ガエタンは東京芸術大学に行つて先端芸術表現をやっていました。いい人材がそろいました」

「モデルは背の高い女の子を探してきて頼みました。女の子の仲間は、自分で服を作つて着ていました。僕は自分でも着るし、作つてモデルに着てもらったりもしました」

——自分で縫製をして——。

村田「自分で縫つて。家庭科ではエプロンづくりがめっちゃめっちゃうまくつたです（笑）。3年の夏休みに、ファッション専門学校に行こうと思ひ、サマーセミナーに通つたのですが、そこで服作りのさわりを教わり、ファッション



清水さんが岐阜県の「飛騨産業」（担当が富士高出身！）と開発した椅子に座り対談

ショーで作ってみました」

——ファッションショーは見ていたんですか。

村田「ユーチューブでよく見ていました。クリスチャン・ディオールやジョン・ガリアーノのショーがめちゃくちゃ格好良くて。最高のファッションショーを見ていたので、音楽の選び方とかも参考にできました」

清水「それは3年生だからできたんでしょうね。中学から入ったばかりの1年生じゃできない」

村田「石の上にも3年ですわね」

——清水さんはそういう発表の場はあったのですか。

清水「裏方で、こまごま作っていましたけれど、どーんと発表するようなことはなかったですね(笑)」

——村田さんは、卒業後はどちらに？

村田「エスモードジャポン東京校というファッションの専門学校に行きました。3年の時に神戸ファッションコンテンツで特選を受賞し、留学資格を得ました。本当はパリに行きたかったのですが、ミラノ出身の審査員の先生に気に入られて、ミラノに行くことにしました」

——清水さんもミラノで活動されるのですよね。

清水「フリーになってグラフィックデザイナーとして仕事はあったのですが、プロダクトデザインをしてみたいと

すが、畳の本来の使い方を知らないで、ふる場から出たところに畳が置いてあったりする。畳のある和室に、どん

とベッドが置かれていたりする。もうちょっと本当の畳の使い方を畳の生地とともに知ってもらいたいと思いました。それで、ミラノに在る間に畳の勉強をしました。畳はお尻を乗せるし、寝っ転がるので背中もつける。物も乗せる。それぞれの機能を分解して西洋のライフスタイルに合うように展開することを思い立ち、家具の国際見本市ミラノサローネで畳表を西洋の家具に落とし込んだ作品を自腹で作って展示しました。食いつきがよく、商品化も決まりました」

「日本に帰ってきてからも自腹で、デザインした家具を見本市に出品しました。メーカーは自分の会社でも、デザイナーを抱えています。殻を破りたいというメーカーが声をかけてくれるようになり、プロダクトデザインの仕事も



村田晴信（むらた・はるのぶ、高校59期＝2007年卒）エスモードジャポン東京校卒業後、イタリアに渡り、マランゴーニ学院マスターコース修了。ディナー国際モードフェスティバルでパリ市長賞受賞。12年秋冬ミラノコレクションでデビュー。18年にブランドHARUNOBUMURATA始動。



清水慶太（しみず・けいた、高校45期＝1993年卒）デザイナー。東京芸術大学、女子美術大学の非常勤講師。74年東京生まれ。幼少を米国で過ごす。98年東京芸術大学美術学部デザイン科卒、00年同大学大学院美術研究科修士課程修了。03～06年ミラノを拠点に活動。19年（株）クリエイティブノルム設立、代表取締役。

思っていました。ミラノで修行して帰ってくる人も多く、イタリア人からプロダクトデザインを学ぼうと思い、29歳の時にミラノに行きました。正規に雇ってくれるところはないのですが、インターンシップのような形で受け入れてくれるデザイン事務所が見つかり、わずかな収入を得ながら学び始めました。でも、イタリア人から学ぶというよりもイタリアに在ること日本人としてのルーツを意識するようになりました。イタリア人たちも自分たちのまねをしてもらおうと思っではおらず『日本人ならばどうするの』と尋ねてくる」

村田「ミラノに在ると、そういうことが見えてきますね。日本人にしかできないものが求められる。具体的にはミニ

マル(必要最小限)なもの、禅の精神みたいなもの」

清水「禅という言葉も何度も聞かれました。当時、畳に人気があつて、インテリアに取り入れる動きがあつたので

軌道に乗り始めました」

——村田さんはミラノに行きマランゴーニ学院でマスターコースを修了。それからプロを目指す——。

村田「デザイン事務所を訪ねても、どこも雇ってくれませんでした。その頃、ミラノコレクションを運営するイタリアファッション協会が主催する若手向けのコンペ『ネクストジェネレーション』で勝てばミラノコレクションにデビューできると聞いて作品を出したところ、選ばれて、2012年にミラノコレクションでデビューしました。ミラノには積極的に新しい才能を見つけて支援してこういう仕組みがあります。その実績をひっさげてジョン・リッチモンド社に入社しました。自分の目指すテイストとは真逆のデザインをする会社でしたが、基本的なことを学ぶにはいい企業でした。そして3年後、もともと行きたかったジル・サンダーに入ることができました。デザイナーのレベルも高く、求められているものも高い。そこには憧れていたトップレベルのファッションの世界がありました」

——ミラノで修行された後、独立された。

村田「自分の世界を発信していきたいです」

（2019年10月11日、東京・吉祥寺のクリエイティブノルム本社で。文・相川浩之、写真・落合恵子）

富士高だから開花した ぼくの役者人生

高校45期・俳優
北村有起哉さん

映画やドラマ、そして舞台と、幅広く活躍する俳優・北村有起哉（高校45期）。時に芝居でみせる冷酷狂気な役柄とはうらはらに、普段の彼は高校時代と変わらずに肩の力が抜けきったように穏やか。地元・阿佐ヶ谷での取材当日も、昔と変わらず「富士高生のアシ」自転車でやってきた。

——30年も前のことですが。なぜ、富士高へ。

「姉二人も都立だったので、自分もと。校舎が新しくなると聞いて、富士高を受けることにしました。実はもう一校、私立の英語科にも合格していたのですが、そこは男女比が2…8。普通なら両手に花と喜ぶはずが、なぜかその時は『えっ、男友だち作れるの』と不安になってしまい。それもある、第一志望の富士高に入学しました」

——富士高での3年間は、どんな時間を過ごしましたか。

「一言で表わすと『野放し』かな。やり過ぎた時はやんわり決定。ただ、言い出しっぱだったんで、脚本やキャスト

ング、演出のほとんどを請け負うことになってしまいました」

「文化祭では各部が西高戦を控えていて、男子バスケットもそれに向けて猛練習中だったのに、ありえないダブルブッキングにキャプテンはカンカン。当時は西高への対抗意識が結構強かったから、試合にも出たい。ぼくが演じた師匠は重要な役どころだったのに、試合と重なる公演だけむりやり早死にさせ、コートへ飛んでいきました」

——3年の『仁義なき戦い』も総監督的な立場。キャストキング権限があったのに、主役をとは思いませんでしたか。

「ジャッキーの時もそうだけど『そこはオレじゃないな』と。主役を演じるよりも自分にしかできない場所がある気がして。それは、役者になった現在も同じです」

——あのこずるさは有起哉くんには出せなかった（笑）。

「適材適所かな。持ちつ持たれつしながら『みんなで作る』その楽しさを知ったのは体育祭や文化祭を通してです」

——同級生とはいまも会っていますか。

「男女問わず、同級生だけでなく先輩や後輩とも。年に何回かは集まるし、みんな家族を連れて舞台を観にきてくれます。ぼくはずっと地元とつながっているおかげでいつも地に足がついている、自分らしくいられているような気が



北村有起哉（きたむら・ゆきや、高校45期＝1993年卒）74年東京生まれ。数多くの映画・ドラマ・舞台に出演するほか、深みのある声を生かしたナレーションも好評。古典・時代物の舞台から、主演を務めた『太陽の蓋』や『新聞記者』などの社会派映画作品と、その活躍の場は多岐にわたる。父は俳優の故・北村和夫。

りと諭されましたが、基本的には自由。『あれしなさい、こうでなくてはダメだ』と、何かを押し付けられることはありませんでした。先生方にしたら過保護にするよりも難しく忍耐のいることだったのではと、自分が大人になったいま、そう感じています。部活（バスケット）とイベントに夢中で取り組み、全力で楽しんだ3年間でした」

——イベントには、どんな風にかかわってましたか。

「体育祭では、2年、3年で応援団に参加。オリジナリティある振付を考えたり、学年カラーに髪を染めたり。『どうしたらカッコよくなるか！』をみんなで考えました。文化祭は、1年では全校で1クラスだけがでける食堂を」

——劇は2年での『ジャッキー・チェン』が最初？

「そうです。女子が推す文芸路線には興味がなくて、カンフー映画のジャッキーを挙げて男子をまとめたら、あつさ

します。みんな、さまざまな職業に就いているので、彼らの話を聞けることでも演技の幅が広がります」

——富士高での友人関係は刺激になっているんですね。

「いい意味でぼくを感化し、好奇心をのばしてくれたのは富士高の友だち。歳を重ねるごとにみんな魅力的になっていくので、会うたびに糧になるし、役者として人としてのぼくを育んでくれるかけがえのない存在です」

「役者になるなんて思ってもいなかったのに、いまこうして俳優・北村有起哉がいるのは富士高での3年間があったから。この仕事にやりがいを感じ、日々充実していることを思うと、15歳のぼくの選択は間違っていないかったかな。45にもなればみんな経験も豊富。そうそう褒めてはくれません

が、『なにやってんだよ』とダメ出しされないように、ぼく自身も一層励まないと。デビューから観てくれているから、怠けられないんですよ（笑）」

（2019年7月26日、カフェ・ド・ヴァリエテで。文・廣井章子、写真・落合恵子）

北村有起哉さんとインタビューを担当した同期の廣井章子さん



ラオスの図書館で 子どもたちの世界を広げる

高校32期・ラオス山の子ども文庫基金代表
安井清子さん



安井清子（やすい・きよこ、高校32期＝1980年卒）
62年東京生まれ、国際基督教大学を卒業後、タイのラオス難民キャンプで子ども図書館活動に従事。現在、ラオスの首都・ビエンチャン在住。3つの図書館を運営、少数民族・モン族の民話の収集・記録などの活動を続ける。

人形劇団の活動を通して、ラオスの少数民族・モン族と出会い、本を読む機会がない子どもたちのために図書館をつくる活動を始めた安井清子さん（高校32期）。2019年5月ラオスフェスティバルで帰国時にお話を聞いた。

——ラオスの子どもたちはどんな本を読んでいますか？

「ビエンチャンには公用語のラオス語の読み物があります。が、数が少ない。特に、絵本を卒業した中高生が楽しめるような物語の本や翻訳物もほとんどないんです」

——そこで安井さんはラオスに図書館をつくられている。

「今はラオスの3カ所にあります。前の住まいの隣にくったビエンチャンの図書館は、最初は茅葺屋根の簡単なもので、本を読む場所というより遊び場でした。学校に行けなかったり働いて家計を助けたりする子どもが多いので、本に接する機会をつくりたかった。最近、日本の財団から

図書館に来る中高生に奨学金をいただいているのですが、昨年初めて大学レベルまで行った子が出たんです」

——安井さん自身はどんな高校時代を過ごしたのですか。

「中学の時は勉強をよくしたけど、高校ではもう好きなことやっていたいと思って、ハンドボール部へ。その頃ハンド部女子Ⅱ体育祭実行委員会という感じで、体育祭の仕事は目の下にクマが出るまで頑張った。最後の校歌ではボロボロ涙が出ました。大学ではワングル部に入って、合宿で大勢で同じ釜の飯を食べたり、1週間ぐらい山に登ったり」

——学生時代からラオスには興味があつたのですか？

「全然（笑）。大学卒業後、就職した人形劇団「おはなしきやらばん」が、1984年、タイの難民キャンプに行くことになり、そのメンバーに加えてもらったのが最初のきっかけです。人形劇を食い入るように見つめる子どもたちのキ

ラキラとした目が忘れられませんでした。翌年、シャンティ国際ボランティア会に加わって、別のキャンプで子どもたちの図書館を開くという機会が巡ってきました」

——その経緯は安井さんの著作『空の民の子どもたち』（社会評論社）に書かれていますね。

「ラオスは約50の民族が住む多民族国家で、ラオス語が公用語ですが、難民キャンプに数多くいるモン族はモン語でしかも文字を持たない山岳民族。最初は集まった子どもたちに絵本を見せながら、『ダッチ？（何？）』と絵を指して聞いて、言葉を覚えていきました。ある日、ゴザを敷いて木陰図書館を開き、『おおきなかぶ』を、モン語で『イオペ（123）』と即興で読んでみました。すると、子どもたちにも通じたんです。絵本は絵で語るので、文字をすべて訳さなくてもわかるんですね」

——その後、今度はゲオバドゥ村に図書館をつくることに

なったのですよね。毎年5月のラオスフェスティバルでは、モン族の刺繍製品等を扱うブースを出店



著作『ラオス山の村に図書館ができた』（福音館書店）は、その時のお話です。

「テレビ取材でラオスに来た武内太郎さんとの縁からできた図書館です。太郎さんはその後、事故で亡くなってしまったのですが、太郎さんのお母さんが図書館をつくる資金を出してくださって、『ラオス山の子ども文庫基金』を設立。今もラオスの図書館活動に役立たせてもらっています」

「活動を続けるうち、小さい頃図書館に来ていた子が高校生になって手伝いに来たり、仕事を持てなかった女性が働きに来たり。図書館はつくるだけじゃなく、現地の人たちが関わっていくことが必要だと実感しました」

「ラオスでは本を読む機会はまだ少ないですが、本は自分の心の世界を大きく広げてくれる。そのために、小さい頃に本やお話に出合うことがとても大切だと思っています」

——富士の後輩たちにアドバイスはありますか。

「難民キャンプに行ったとき、自分で人生を決められない人がいると知りました。今の日本で生まれ育った自分は、やりたいと思ったらできる。だからこそ、自分のためだけに動いてはいけなさと。自分と違う立場の人や自分自身のことを知るためにも、いろいろな人と出会ったり、行ったことのないところに行ってみるのは大きいと思います」

（2019年5月30日、カフェ・ド・ヴァリエテで。文・綿谷朗子、写真・落合恵子）

40歳で第二の人生を考えよう 「楽しいかどうか」が選択基準

高校9期・幟旗収集家／研究家
北村勝史さん（故人）



北村勝史（きたむら・よしちか、高校9期＝1957年卒）幟旗収集家・研究家。38年静岡市生まれ。立教大学経済学部卒。日本アイ・ビー・エムを55歳で早期退職。露天商となり、江戸期の幟旗を収集。ICU博物館、日本民藝館、松濤美術館、ワールド美術館（オランダ）などで展示会を開催。2019年80歳で逝去。

55歳で日本アイ・ビー・エムを早期退職。露天商になり幟旗の収集家・研究家になった北村勝史さん（高校9期）。内外の美術館で幟旗の展示会を開くなど、幟旗分野の第一人者として活躍した。2019年5月、東京三鷹市で「江戸期の幟旗」（「伝統文化と和みの広場」主催）を開催した10日後に急性心筋梗塞で亡くなった。その個性的な第二の人生は、貴重なお手本になる。

——第二の人生、どんな準備が必要ですか。
「企業勤めの人が現役を引退する間際になって、これからどう生きるのかと考えるのは遅いと思います。勤めている会社が生活を支えているのだから、そこで全力を尽くすことが第一だけれども、40歳くらいになったら、定年後どう生きるかを考え始めた方がいい。忙しい時期だから、定年後は何かなるだろうとか、今の仕事の延長でいいだろう

と考えがちですが、同時並行的に60歳以降の人生の路線を明確にしていかなければなりません。これで行くという道が見えたら、まっしぐらに突き進みましょう」

——北村さんはどんな準備を？

「僕は30代前半に古物商許可証と行商従業者証をとりました。将来、露天商をするとは思っていませんでした。とおいて損はないと聞いてとっておきました」
「会社人生だけで終わるのはつまらない。何か趣味を持とうと思っていました。僕は父親の影響もあり、骨董が好きだった。最初は東北の伝統こけしの収集を20代から始めました。富士高校で付き合っていた女性と別れた時に、百貨店の東北物産展でこけしに出会いました。女の子にエネルギーを費やすよりこけし集めにエネルギーを使おうと思い、30代半ばまでコレクションを続けました。様々な年代の仲

間12人と同人誌『木の花』を10年にわたって発行しました。

でも、コレクションは本当にいいものを見てしまうとそれ以上のものがなかなか出てこない。そうなる飽きてくる。それで、今度は東北の江戸期の土人形を集め始めました。資金が必要になるのでそれまでの伝統こけしのコレクションは全部売って、土人形を集めました」

「土人形も10年くらいで名品を見てしまった。それで次はどうしようかと困っていたら、日本の染織にはまり、40代、50代はそのコレクションをしていました。そうこうしているうちに古い幟に出会い、収集を始め、これが第二の人生のテーマになりました」

2017年10月に大崎ウエストギャラリーで開いた「江戸期の文字幟」展で。



——突然、幟の収集を始めたわけではないのですね。

「子育てが終わる40代の後半には人生観を明確にしたいですね。今の仕事面白くてその延長で仕事をしていくのもいいし、趣味で生きるのもいい。テーマが決まったら具体的に何をするのかのビジョンを作る。僕は55歳から幟旗の収集をテーマにした20年間のビジョンを作りました。そして『20年以内に都内の有名美術館での展示』という目標も達成しました」

「どんな道を選んでもいいのだけれど、それが『楽しい』かどうかが一番大事。楽しくなければ何をしていても絶対にうまくいかない。経営計画をどう作るかも重要です。僕の場合、退職金で住宅ローンをすべて返し、退職金の9割は年金の形でもらい、それは女房に渡しました。自己資金は100万円。新しい仕事をするにあたって、あるいはそれが失敗しても、家計に影響を及ぼさない、家族を苦しめないということは大前提です。格好をつけて都心に店を出したり、従業員を雇ったりはせず、自分だけで商売をしました。古美術商『幟家』は18年やって、絵幟180点、文字幟60点のコレクションを得ました」

（2017年10月12日、喫茶室ルノアール中野北口店で。文／写真・相川浩之、写真・石黒裕子）

自由を発展させた「富士元禄世代」 西高と組んだ学校群制度が転機に

谷畑充先生と卒業生8人が「富士」を語る

富士高校は前身の第五高女から中高一貫まで度重なる制度の変遷を経て、創立100周年を迎えた。100年の間に何が培われ、伝統として受け継がれてきたのだろうか。富士高を卒業し、教師と同窓会長を務めた谷畑充さん（高校9期）を男女8人の卒業生が囲み、それぞれの「富士」を語り合ってもらい、富士のDNAを探った。

芳根「本日は各世代の方にお集まりいただきました。それぞれが思う富士高校を語っていただきます。若手から」

野仲「一番印象に残っているのは、『シンデレラ階段』です。私たちの時代には2階の昇降口に上がる階段を『シンデレラ階段』と呼んでいたのですが、文化祭の時に、下から見ると一つの絵が浮かび上がるように一段一段に部分となる絵を貼り付けていました。それを作るリーダーをしていました。学年を超えたメンバーで集まり、夏休みに学校に行って、ひたすらベニヤ板に下書きをし、色を付けて貼る作業

をエネルギーを使ってやった思い出があります」

反中「高校53期の田辺純一さんという1999年発行の校友の編集長をされていた方が、『僕たちの代が始めたのではないか』と話されていました」

芳根「廣井さんの思い出は」

廣井「富士高に入って驚いたのは、入学式で生徒会長に『上履きが指定になってごめんなさい』と謝られたことです。受験日に初めて富士高に入った時、あまりの汚さに『わざ

と落ちようか』と思いました。それが、入学式の日にピカ

ピカに光る学校を見てビックリ。建て替えられることを知らなかったんです。実は、先輩たちは土足で校舎に入っていたらしく、新校舎になって『お前ら汚すなよ』ということで上履きが指定になってしまった。『僕たちの至らなさをせいで』と謝られましたが、中学まですべて指定が当たり前だった私にとって、履き物の自由が奪われたことを大事として捉えていた感覚がとても新鮮でした」

「上履きは学年ごとに色分けされていて、3年生がエメラルドグリーン。2年生がえんじで、私たちのブルーは一番トイレのサンダルっぽかったです。1年下はグレーでどんな服にも合うのいいねと言われていました」

飯島「体育祭の時はその色じゃないの？」

廣井「体育祭の時は学年カラーで、1年生が白で、2年生が青で3年生が赤。応援団やチアガール、マ스ゲームでの衣装はその色をベースにしていました」

芳根「ごめんなさい。僕、高校時代、土足で上がっていました。誰にも指摘されなかったのです」

「30期の飯田先輩から33期の増田くんあたりまでは、反中さんが『富士元禄時代』と呼ぶ時代を生きてきました。学校群という制度が導入され、西高とともに、中学の時は成



谷畑充（たにはた・みつる、高校9期＝1957年卒）62年3月東京理科大学理学部数学科卒。63年4月～86年3月富士高校教諭（数学科）。86年4月都立戸山高校に転出。99年3月定年退職。2000～11年度若竹会会長。卓球、山登り、ハイキング、ドライブ旅行がかったの趣味。「今はどれもできません」。



野中(半澤)早苗(のなか・はんざわ・さなえ、高校57期=2005年卒)03年文化祭実行委員(装飾の責任者)。09年首都大学東京地理環境コース卒。同年三井不動産レジデンシャルリースに入社。趣味は、城めぐりやツーリング。中学より吹奏楽を継続しており一般団体「吹奏楽団オデッセイ」に所属。

績が優秀だった子供たちが入ってくる32群だったので、先生も自主性を尊重してくれていたのだと思います」

増田「今、阿佐ヶ谷で喫茶店を経営していて、富士高の卒業生が来ると、当時、僕が高校でやらかしてしまったことをいろいろ話すのですが、印刷物になると全部伏字になってしまうので(笑)、富士高の元祿時代の一端をお話したいと思います。僕は合唱部、軽音楽部に所属していたので、文化祭に向けて練習ばかりしていました。そのために学校に行っている感じ。マージャンが好きで、南風荘という雀荘に行っていました。向かいにお寿司屋があつて、雀荘から出ると、よく生物と地学の先生が赤い顔をして出てきました。マージャンは高校の仲間と卒業以降、ずっとやっています。認知症防止にもなるというってみんなに勧めていて、女性で初めてやる人も多くなった。使うテキストは26期の



飯島章博(いいじま・あきひろ、高校31期=1979年卒)軟式野球部4番捕手。高校時代、宴芸団体「みます」主催。ペンネーム「堀ノ内ピーマン」で「ぴあ」の「はみ出しゆーとぴあ」やラジオ投稿で有名に。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒。現在、飯島章博演出事ム所CMディレクター。

先輩、井出洋介さんの著書です」

芳根「イーマン(飯島)は、富士高時代にやってきたことを大人になってもやりきってプロとして生きてきたわけじゃない?どの学校に行っても、そうなれたかな」

飯島「中学時代は野球をやっていて、頭よりも運動神経というやつらとばかり付き合っていたから、まじめで頭のいいやつばかりの学校はつまらないと思って入ったら、面白くて。1期上に飯田さんという『エイトマン』の踊りをしてる人を見て、『うわー、何やってもいいんだ』とわかり、文化祭と体育祭だけをやっていた(笑)」

芳根「僕は同じ中学の仲間が落ちてしまつて、つまらないと思つていたら、文化祭を見て富士に入ることを決めたという井上明彦君とイーマンがいて、楽しい高校生活になった。40歳を過ぎて富士高を思い出そうということになつて

1年かけて同期全員に連絡をとろうと活動を始め、あいつが元気で見つかつたとか途中経過の報告だけで酒を飲んでいた。中野サンプラザに集まり、後夜祭の再現をしました。250人くらい集まりました。当時斜に構えて見ていたやつは相変わらず見ているだけ。でも、それでも楽しい。それぞれの居場所だから。この空気に触れて生きていてよかったと思いました」

飯田「高校時代で印象に残っているのは白衣。お医者さんの卵か科学者の助手みたいな感じでみんな白衣を着ていた。みな白衣に名前とか漫画を描いたりして自分なりの白衣にしていた。それと、ものすごく汚かつた。ホコリと土が廊下にたまっている。とても自由で生徒会も誰一人話を聞いていない(笑)。体育祭と文化祭のパワーもすごかつた。文化祭の後には中野と新宿は富士高生ばかりだった」



廣井章子(ひろい・あきこ、高校45期=1993年卒)当時は軟式だった野球部のマネージャー。明治大学商学部商学科卒。大学卒業後、平和を考える月刊誌や教育情報誌ほかで編集、広告制作などを行う。現在はフリーランスのライター・編集者としてカラダによいテーマを選び、媒体づくりに関わっている。



芳根聡(よしね・さとし、高校31期)ハンドボール部キャプテン。立教大学社会学部観光学科卒。87~91年青山246クラブプロデューサー、92~08年(株)スーパー・タンク代表取締役。現在、NPO法人ほっとステーションで訪問介護管理者・介護福祉士として働く。座右の銘「生きているだけでめっけもん♪」

芳根「飯田さんのエイトマンはグループ感があつて別格だった。さて、このあたりで富士高の女性の話を。西高の人は男女で飲むと男性のほうが多くお金を払うけれど、富士高は男女一緒のことが多い」

谷畑「富士高の同期会は男女同じくらいの数が集まつて高校時代のまま、打ち解けて話するのが他校にあまりない特長かもしれない。すぐ名刺交換したりもしない。若い頃にそんな対等の付き合いのできる素晴らしい女性たちがいたので、卒業後もリベラルな付き合いができるのだと思う」



増田佳彦（ますだ・よしひこ、高校33期＝1981年卒）大学時代、映像制作会社でアルバイト。仕事に魅力を感じ、大学を中退して入社。以来一貫して映像の仕事に携わる。2001年映画「みすゞ」プロデューサー。10年から2年間、コーヒーについて学び、12年阿佐ヶ谷に「カフェ・ド・ヴァリエテ」を開店。

飯島 「そのためなかなか恋愛に発展しない」

芳根 「その発言、物言い！ 今日偶然、谷畑先生、飯田

さん、イーマン、増田さん、みな富士高生が奥さんです」

谷畑 「地歴部の3年と1年の関係で、僕は子弟結婚ではない。恋愛結婚です（笑）」

落合 「私は27期で、男女の数がちょうど同じになった期です。男女が自然に入り混じる感じで、仲が良かった。（国語の）小泉千枝先生や（美術の）佐藤美智子先生はキャリアを持つて自分らしく生きている身近な女性として刺激を受けました。今も付き合っている高校時代からの友達も自分にとって一番刺激を与えてくれる存在です。家庭や子供の話よりも、自分が何に夢中になっているかを話すことが多いです。同じ中学から来た男子生徒も、富士では急にフェミニストになったり。私にとっては心地よい場所でした」



反中（梅田）章子（たなか・うめだ・あきこ、高校23期＝1971年卒）高校時代は新聞部。学習院大学卒。専業主婦を経てマニュアル制作会社で定年まで勤める。「都立高校の学校群制度とは何だったのか」を終生のテーマにしたいと思っています。50年間もやまやしている人、つながりましょう。

飯島 「女性だけでなく、それぞれが相手を認めていた。だからいじめなどは絶対に起こらない」

落合 「文化祭の時におなかを壊して休んでいたりして学校に出ると、『はい、あなたはこれよ』とちゃんと役割を残しておいてくれるんです。その人間の好きなこと、得意分野がわかっているのはすごいと思いました」

飯島 「同期会も楽。方向だけ決めると後はそれぞれがどんな役割分担してやってくれる」

反中 「学校群というのは私たちの1期上の22期の人たちが中学生だった夏に唐突に決まったんですね。十分に対応できないまま受験を迎えてしまった。一番、皆が納得できなかったのは、合格しても希望の高校に行けなかったこと。そのもやもや感はずっと引きずっていたと思います。学園紛争も燃え盛っており、22期の人たちは富士高の歴史の中

でも特異な体験をされた方々だと思います。授業をつぶして討論会をしたり。学校は「当局」で、対決すべき相手だった。制服の（義務化の）廃止とか、いろいろな自由への動きが活発で、私たちはそれを受け継いで一部を実現させました。そして自由な富士高が開いたのが30期以降の世代なんだと思います」

芳根 「僕たちは三無主義の世代と言われました。三無主義だけど自由だけはあった」

反中 「今、皆さんの話を聞いていると学校群制度もそのまま続けばよかったんじゃないの？と思いますね」

谷畑 「学校群は当初旧制中学の1位、2位、旧制女学校の1位、2位が組むような案だった。その案に対して教員も動きました。『これからは男女共学の流れなのにおかしい』という意見と『富士高校は優秀な女性だけでいい』という意



落合（塚本）恵子（おちあい・つかもと・けいこ、高校27期＝1975年卒）学習院大学哲学科（美術史専攻）卒。住宅メーカー、大学研究室、室礼教室、出版社、百貨店（着物販売）などで勤務後、現在は認知症の母を在宅介護（10年目）。若い方々に茶道・いけばな・しつらいを教える活動が続けていきたいと思っています。



飯田俊成（いいだ・としなり、高校30期＝1978年卒）高校時代はバスケットボール部芸能部担当。青山学院大学経済学部在籍時に青山シナリオセンターのプロデューサー講座に通う。卒業後、日本映像設計で映像制作を学び、フリーの映像プロデューサーに。現在は共同テレビジョン第3制作部に在籍。

見に分かれました。でも、男女共学の流れという正論が通り、ふたを開けてみると、西―豊多摩の組み合わせが西―富士に変わっていた。学校の制度に関わる最初に出た行政の案が修正されるというのは最初で最後でした」

飯島 「そういう時代に俺がいても何もできなかった（笑）」

谷畑 「教員の立場で戦後民主主義を一つひとつ作っていくことが楽しかったです」

芳根 「去年の文化祭で女の子のバンドがアンコールを求められ、もう曲がなくてアカペラで富士高の校歌を歌った。ぐつとききました。激動の時代もあり、いろいろな変化があったけれども、先輩の背中を見て、脈々とつながっているものが富士にはあるのではないかと強く感じました」

（2019年7月22日、あづまで。文・相川浩之、写真・落合菜月）

「高校になると急に大人扱いに」 「互いの個性を認め合う校風」

安倍宏行さん（ジャーナリスト）×高校71期生の皆さん

10年前に中高一貫校になった富士。6年間、富士で育った若者たちは、それまでの「富士高生」とは違う意識や感性を持っているのではないか。第五高女から続く富士のDNAは、彼らにどのように受け継がれているのだろうか。高校26期のジャーナリスト、安倍宏行さんが、2019年3月に卒業したばかりの高校71期生4人とざくばらんに語り合った。

——71期生が中学2年生の時に、それぞれのライフデザインを考える第一歩となる「進路探究」の授業の講師を務めてくれたのが安倍宏行さんです。「働く意義」「職業を通して社会との繋がり」というテーマで、自らの仕事への取り組みや国際人として生きることなどについて、わかりやすく語ってくれました。安倍さんの話を聞いた生徒たちの質問が途切れなかったのを思い出します。

安倍「授業をしたときはフジテレビを57歳でやめて会社を

作った頃でした。大学を出て、同じ会社はずっと勤めているのが普通だと思っている人が多く、日産自動車からフジテレビに行つて、会社を立ち上げた話を聞いて『好きなように生きていいんだ』と思ったらしい。そんな話をしたのだけれど、皆さん、大学に入つて、思い通りに過ごしていますか。大学は面白いですか」

（全員うなずく）

安倍「思っていたことと違うことはない？」

油井「彼氏ができないこと（笑）」

岡野「先輩もいい人で友人もたくさんできて楽しいけれど、まだ充実感がない。意義のあることを何もしていないので、何かやってみたいと思っているところです」

飯島「地球科学の勉強が楽しいです」

井上「高校の時に1年アメリカに留学し、海外に行きたいという気持ちはいつもあります。ICU（国際基督教大学）

に入りましたが、卒業後は海外の大学院に行つて経営学を学びたいと思っています。人事とか人材育成の分野で仕事がしたくて」

安倍「大学に行くと、受けた授業は自分で選ぶし、あとはサークルやゼミがある。自分で組み立てられる部分が多いので、学校以外で活動もできる。いろんなことができるから迷うこともあるのだろうね。自分の大学生活4年間をどう充実させるかは大事なテーマだと思う。中高ではそんなことは教えてくれない。大学生はすべて自分で考えなければいけない。飯島さんは具体的な目標はある？」

飯島「気象に興味があるので気象予報士の資格をとりたいなと思っています」

安倍「井上さんは大学の授業以外で何かやっている？」

井上「学生団体による世界規模のビジネスコンテストがあ



安倍宏行（あべ・ひろゆき、高校26期＝1974年卒）
「株式会社安倍宏行」代表取締役、Japan In-depth編集長。55年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。日産自動車などを経て、92年にフジテレビ入社。2002年、『ニュースJAPAN』キャスターとなり、滝川クリステル氏とのコンビが視聴者の注目を浴びる。





飯島圭吾 (いじま・けいご) 日本大学文理学部で地球科学などを学ぶ。高校ではバドミントン部の主将を務める。

り、その運営に関わりたい」

安倍 「焦る気持ちが
ある人もいるようだけれど、インターンでもバイトでも、やれることからやれば

いいと思う。旅行もいい」

岡野 「留学に行くことも考えたのですが、先輩がはつきりした目標もなく行くべきでないというので、留学に行く目的ってなんだろうと考えていたら、わからなくて動けないでいました(笑)」

安倍 「中高一貫教育はどうでした？」

油井 「真面目な人は中高一貫の方がみっちり勉強できるというんですが、高校受験があつた方がなかなるみがないといいと感じる人も多かったと思います」

岡野 「6年間一緒にいた友人との絆は深いと思う。6年間一緒にいた先生もいて、何でも話せた」

飯島 「むしろいい学校だと思いました(笑)。受験があると、あまり人とのつながりも深くなれずに終わることもあると思いますが、友人と仲良くなれました」

は技術面のサポートだけで、練習のメニューは自分たちで作れと言われました」

井上 「中学校は縛らなくていいようなところまで校則で縛っていた気がしました。もう少し生徒に考えさせる機会があつてもいいかなと思いました。ただ、高校になるといきなり規則が緩くなって、今までのは何だったのだろうかと思いました(笑)」

安倍 「高校になって『富士らしさ』をどんな場面で感じました？」

油井 「富士高校は個性的な人が多かった。ほかの学校だったら溶け込めなかったんじゃないかと思う人もいじめにあったりしなかった。皆が互いの個性を認め合うところが富士高生らしさではないでしょうか」

岡野 「富士高校の時は受験があつたうえに体育祭、文化祭があつて忙しかつたけれど、やって良かったと思うし、いい思い出になっている。自分たちで作る上げる充実感がありました」



油井彩姫 (ゆい・あやめ) 立教大学コミュニティ福祉学部。高校時代は文化祭執行部長を務めた。メディア志望。



岡野永遠 (おかの・とわ) 法政大学現代福祉学部。高校時代の最高の思い出は、皆で作上げた文化祭。

井上 「中学3年間で知らなかった人とも高校で友人になれました。高校の受験がなかったの、大学に入ったら何をしたいかを、中学の時

から考えていました。高校1年の時にアメリカに留学に行けたのも、中学の時から計画できたからだと思います。東京都のプログラムで行ったので、学年が変わることもありませんでした」

安倍 「富士は『自由』だと言われてきましたが、みなさんは自由でしたか」

油井 「自由な校風と聞いていたけれど、中学校の時は生徒指導が厳しかった。でも、高校になると自由に生徒に任せられることが多くなった。先生に意見を言ったら、とことん付き合ってくれ、納得するまでかみ砕いて話してくれました。自由に意見が言える環境でした」

岡野 「服装や髪形、髪の色などについては厳しかった」

飯島 「中学の時はサッカー部で、コーチや先生が指導してくれたのですが、高校でバドミントン部に入ると、コーチ

安倍 「女子がとても元気というのも富士の伝統」

飯島 「合唱祭でも文化祭でも男子はサボっている人が多くて女子が主体になってやっていて感じはありましたね」

安倍 「富士高校の創立100周年について、どう感じます？」

井上 「母が富士高校卒で、中高一貫になっても昔の富士高生が思い浮かべるような自由さが残るといいなと思っていました」

油井 「女子高が共学に変わったたり、中高一貫が変わったりしながら100年続いて、100年分の富士高生がいるわけです。そうした人たちがどうつながっていくのかはわからないけどすごいことだと思いました」

岡野 「これからもずっと仲良くしていくのは富士の友達だろうなと思っています。卒業生が1つになれる場として富士高がこれからも発



井上海南子 (いのうえ・みなこ) ICU教養学部。高校時代の思い出は陸上部での活動と高校1年の時の米国留学。

士高がこれからも発展していつてほしい。とわに栄えあれ」
(2019年9月7日、富士高校で。文・相川浩之、写真・落合恵子)

編集後記

●新型コロナウイルスの感染が広がる前にインタビューや対談、座談会を終えられ、ほほ思い通りに記念誌をまとめることができた。皆さん、快くインタビューや対談を引き受けてくださり、第五高女の大先輩から中高一貫校の後輩たちまで幅広い世代の声を拾うことができた。ボランティア編集部で、よくぞ100ページも作れたなあと、ちょっと感動。

●「創立100周年 富士DNA」出会い、つながり、未来へ」が創立100周年のテーマ（ご存知でしたか？）。このテーマで記念誌を作った。あえて「卒業後」にフォーカスすることで、富士のDNAが実社会でどんな形で花開いていったのかを追った。インタビューや対談、「校友の100年」などを読み、富士高とは？富士高生とは？をそれぞれに感じていただければと思う。（相川）

●この記念誌の発行に向けてご協力下さ

いました皆様に深く感謝いたします。記念誌を作成していて、府立第五高女から現在の中高一貫校へと変遷する中に流れる『自由な校風のもと、お互いの才能を認め合いながら自分自身を高めていく』という富士DNAを感じました。お読みになる方々が改めて母校に想いをはせる記念誌となれば幸いです。（飯田）

●富士100周年、おめでとうございす！（ありがとうございす！）コロナ禍の折、みななどお祝いできないことは残念ですが、この記念誌を肴に、（できれば早い機会に）先輩も、後輩も、（20歳になつたら）現役も、いつでも、どこでも、宴を持てたらいいな。辛くても、富士の仲間にあえば、大丈夫！相川編集長の渾身の力に感謝します。（芳根）

●高校の同級生の妻とふたりで喫茶店をやりはじめたら、おのずと同窓生が集まってきました。若竹会の方々もお見えになり、本誌のことが話題に。何か面白い企画はないかと聞かれるままに、ジャストアイデアを述べていたら、いつの

間にか副編集長になっていました。自分の企画した対談が自分の店で実現したことを大変うれしく思います。（増田）

●若竹会の記念誌は楽しいものにしたいたいというのが3年前の出発点だったと記憶している。とはいえ、断片的な記事づくりに追われ、完成品のイメージは編集長にお任せの日々だった。「お祝いなんだ！」と叱咤激励しながら走り続けた氏の力量に敬服する。それにしても座談会やインタビューの記事では、誰もマスク

なんかしていない。「コロナ前」の空気がつくづくなつかしい。（反中）

●今回、写真撮影担当としてお会いした多くの卒業生の方々は、どなたも目をキラキラとさせて、昨日のことのように当時のことを話してくださいました。話を引き込まれて、ついシャッターを押すのを忘れてしまったという失敗もありましたが、この時空を越えた様々な「旅時間」が、ひとつにまとまることを幸せに思います。沢山のご協力に感謝いたします。

ありがとうございました。（落合）

●若竹会の行事で、中高一貫校生が探究未来学に取り組む姿に出会い、100周年ワークショップで、富士のDNAを探すというテーマが決まりました。第五高女記念碑披露の式典では、創設者峯島家のご高声を賜り、第五の先輩は「えんじ色の石碑は制服の色ね」と微笑みました。クラス会での「毎日君たちのことを祈っています」という牧師に転身した恩師の言葉も忘れられません。（榎原）

若竹

第47号 別冊

創立100周年
記念号

発行 若竹会 2020年9月1日発行
(東京都中野区弥生町5-21-1 東京都立富士高等学校)

発行人 横山雅之(高校27期、若竹会会長)
編集長 相川浩之(高校27期、若竹会副会長)
副編集長 飯田俊成(高校30期)
副編集長 芳根 聡(高校31期)
副編集長 増田佳彦(高校33期)

■編集部<企画、取材、執筆、撮影、進行など>

須知正度(高校18期、若竹会前会長)／上瀧 守(高校22期、若竹会副会長)／田端洋子(高校22期、若竹会会計監査)／反中(梅田) 章子(高校23期)／増山秀人(高校23期)／安倍宏行(高校26期)／小久保隆(高校26期)／河野 関 薫(高校26期)／落合(塚本) 恵子(高校27期、若竹会副会長)／榎原(佐藤)和加子(高校27期、若竹会会計)／鈴木(下川)真理(高校27期)／飯島章博(高校31期)／荒谷(神津) 伸子(高校31期)／石黒(横山) 裕子(高校31期)／吉田裕之(高校32期)／増田(日笠) 由利(高校33期)／國分(綿谷) 朗子(高校38期)／高木(福岡) 恵(高校38期)／伊東(宮本) 麻紀(高校42期)／廣井章子(高校45期)／笹口舞己(高校46期)／落合菜月(高校57期)／野仲(半澤) 早苗(高校57期)／森田裕之介(高校61期)／木勢翔太(高校63期)

■制作にご協力いただいた皆様=敬称略

<学校関係>

野村公郎(富士高等学校・附属中学校統括校長)
上野勝敏(前富士高等学校・附属中学校統括校長)
降屋 翔(富士高等学校附属中学校教諭)／小野澤一(富士高等学校附属中学校教諭)／岩越 司(高校29期)／橋場友彦(高校38期)／堀 孝浩(高校46期)／鈴木(斎藤) 葉月(高校56期)

<卒業生>

仙葉(加藤)美智子(本科19期)／染谷(庄司) 静枝(本科19期)／井出(巻島) 俊子(本科25期)／猪狩(中山) 恭子(本科26期)／竹内(酒井) 保子(高校2期)／愛甲勝久(高校13期)／中村(金子) 昌代(高校13期)／小森(大宮) 杜喜子(高校18期)／熊崎崇洋(高校27期)／岩越(富士) はるみ(高校29期)／磯崎哲也(高校32期)／井上(松本) 佐保子(高校42期)／若林朋子(高校42期)／久世 智(高校44期)／丹保めぐみ(高校45期)／田辺純一(高校53期)／白井 菜(高校68期)／芝山琴里(高校68期)／津吹さくら(高校68期)／栗飯原彰子(高校68期)／田村祐介(高校69期)／深澤ゆかり(高校69期)／高木彩衣(高校69期)／小寺佳乃(高校69期)／田中綾乃(高校69期)／吉井光貴(高校69期)／岩田歩奈(高校70期)／岡奈津恵(高校70期)／鈴木勇太(高校70期)／野田裕果(高校70期)／平川己夢(高校70期)／金子と樹(高校70期)

■インタビュー／対談／座談会の場所を提供してくれた富士高卒業生が経営する店

- えん酌 柏倉永治(高校31期)
(東京都杉並区荻窪5-10-22 美好ビル2F、050-5597-1184)
- あづま 安田豊稔、宇津橋道子(高校32期)
(東京都杉並区西荻北3-18-2 メインステージ西荻窪駅前2F、03-5310-3822)
- カフェ・ド・ヴァリエテ 増田佳彦、増田由利夫妻(高校33期)
(東京都杉並区阿佐谷北1-42-14、03-5932-0147)

■デザイン

ハープ・スタジオ 布施信二、岩中伸二
(東京都新宿区天神町68滝沢68ビル7F、03-3235-6737)

<表紙の絵について> 横尾英子「山桜」変形10号 東京書籍蔵



新宿御苑に咲く山桜を和紙と岩絵の具(通称日本画の絵の具)を使って制作しました。本作品は『昭和天皇実録』(東京書籍)5,6,7巻の帯絵の原画です。

横尾英子(よこお・えいこ、高校31期=1979年卒)日本画家。1960年東京生まれ。83年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒、同大学美術学部大学院入学(平山郁夫教室)。院展初入選。85年同大学美術学部大学院卒業。昭和天皇実録(東京書籍)の帯の原画を描く。個展、グループ展多数。



10



9



8

8 幟旗収集家・北村勝史さんの講演会
9 講演後、高橋明也さんが美術の佐藤美智子先生に花束
10 講演会後の懇親会で同窓生の結婚を祝う
11 医師の山本雅一さんが中学2年生に授業



2



3



1

1 高校68期・白井楽さん提供の写真、合唱祭(2016年)
2 同、女装喫茶(2016年富士祭)
3 同、ロックバンドの演奏(2016年富士祭)



4

4 中高一貫教育校となり、高校2年の修学旅行はマレーシアへ(2013年)

富士のDNAを

伝え、受け継ぐ

14 富士祭で「若竹会の部屋」開設
15 創立100周年をみんなで考えるワークショップ
16 2015年に100周年事業検討委員会設置
17 新宿・歌舞伎町に第五高女の記念碑を建立



16



14



12



13

12 中高一貫校を知るために若竹会が始めた「富士祭ツアー」。
茶道部のもてなしを受ける
13 薙刀部の演技も見学



15

5 2019年3月、シリコンバレー研修最終日
6 シリコンバレー研修でのアイデアピッチ風景。「世界をより良くするために」がテーマ
7 卒業式後(高校70期)



7



5



6

101年目からの富士～野村公郎統括校長に聞く

2021年から、高校での生徒募集が停止され、富士は全面的に「中高一貫校」となる。101年目からの富士について、東京都立富士高等学校・附属中学校統括校長の野村公郎さんに聞いた。

——中高一貫教育校としてスタートして10年。どんな成果がありましたか。

「6年間で生徒の成長を見守り支援できることが大きなメリットです。生徒は、自己の将来を見据えながら、学業や委員会活動、学校行事、部活動、そして学校外のことにじっくりと取り組み、多くのことに挑戦できます」

——2021年からは富士は全面的に「中高一貫校」としてスタートします。

「高校からの入学者がいないので、教育課程の弾力化が認められ、効率よく、発展的に学習計画を進めていくことができます」

——「高校でやり直しがきかないのでは」と危惧する卒業生もいます。

「併設型の中高一貫校ですから、中学校での卒業式、高校の入学式があり、心機一転、変わる生徒もいます。高校になると教科・科目も増え、新たな先生に教わることもあり、環境が変わります。部活動の種類が変わりますし、自転車通学の許可など、自由度が増します」

「評価は、客観的な指標で行われ、教員の恣意的部分は極力排除されます。やり直しは、いつでもどこでもできます」

——生徒によく話されていることは。

「二兎も三兎も追えと言っています。追う過程にチャンスがあり、そのチャンスをものにしないに関わらず、自分をチェン



ジできる。「challenge・chance・change my mind」です。周りを巻き込み成し遂げろと言っています。富士には、世界にchallenge、失敗してもgood tryという言葉があります」

——中学のころは与えられる課題が多く、校則も厳しいと聞きます。

「確かに中学生は、管理されていることが多いと思いますが、それだけ守られているということです。高校生になれば、自由度が増すように見えて、実のところ本当の厳しさがあるのだと思います」

「生徒は主体的に取り組み、精神的・経済的・社会的に自立(自律)していく資質・能力を身に付け、真の自由を獲得してほしい。生徒には、『自主自律である限り自由である』と言っています」

——101年目からの舵取りは？

「富士2世紀。富士にとって良いことは、枠にとらわれずなんでも取り入れたいと考えています。若竹会の皆様も生徒の成長に関わっていただけないでしょうか。例えば土曜講座等で、若竹の先輩方に、生徒に色々話してもらいたいです」